古今集詳解

四

187
322

中郎就右蔡邕

古今集詳解

東京

文學圖書館

187-324

中邨秋香著

古今集詳解

巻の四

東京

文榮閣藏版

明治
41 11 6
交内

古今集詳解第四

中邨秋香講述
加藤きみ子筆記

古今和歌集卷第十七

雜歌上

雜は字音で雜の歌とよむ　雜とは四季に對して、其外の歌をも、又四季、戀に對して其外のをもいふが　此集では四季、賀、離別、羇旅、戀、哀傷に對して其外の歌をいふのぢや、

題しらず　よみ人しらず

我うへに露ぞおくなる天の川と渡る舟のかいのしづくか

此歌をはじめ次々の歌ども、七月七日の內宴に召されてよみしものぢやらうといふ說があるがそれは從はれないよし正義に言はれたは、至當の論ぢや

仙し歌の上について見るに、七月七日の夜、宴會とか何とかで夜ふかしをして、夜氣の冷かに身に覺えるからよんだものらしい　露ぞおくなるの語勢がどうもさやうに思はれる　偖又初句の「我がうへに」は、我がそでにの寫誤であらう　そとうとは誤りやすく、又てはへと互に誤つた例が古來多くある　是は古くはへをてとかいたからぢや　我がうへに露のおくといふは、聞えぬ詞づかひぢやからである　前にいふ通り、何かの事で夜ふかしをして夜氣が冷かに身に觸れて衣袖などが濕りけがついたのを、我袖に露がおくといひなしたぢや　○わじが袖の上が露つぱい事であるが、是は今夜はたなばたが天の川を急いで渡る晩ぢやからして　其船の櫂のとばしりの雫がちつて來ての事か知らぬ、

思ふどち團居せる夜は唐錦たゝまくをしき物にぞありける

「思ふどち」は、親しき友同志といふこと　團居は字の如く車坐にすわる事　「唐にしき」は、たゝまく云々の序　裁つを立つにかけたので、唐錦のうるはしいのは裁切る事が、何となく惜しく思はれるものぢや、それを席を立ち去るがをしいといふにかけたのぢや　「たゝまくをしき」はたゝん事がをしいといふぢや　○親友同志が寄りあつて車坐になつて話をする晩はあの立派な唐錦のやうに、だゝんことが何分にもをしく思はれるものでサあるわい、

うれしきを何に包まむ唐衣たもとゆたかにたてといはまし

昔は概して袖が大きかつた故に、今の世の風呂敷のやうに、物を包む用にもわてたのぢや　袖に包むといふ詞を用ふるは之に本づくのぢや　さて嬉しいだの悲しいだのといふ情は、もとより物に包むなどの事の出來るものではないけれども物を包むといふ上からして姑くよそへて言ひ　又其情の深いのを包み餘るなども言ふのである　「何に包まむ」の何にはいかにしてといふ事、何物にといふではない　即ち此嬉しい情をいかにして包まう、何分にも包みきれないの意ぢや　「たもとゆたかに」は、袂をタップリとの意　「たてといはまし」は、今着用してある衣服につついていふ　其衣服を仕立てる時袂を十分にタップリと裁ちて仕立てよといふべきであつたものをぢや　是は何かはしらず、至極の悦ばしい事が有た時の歌ぢや、○此嬉しいのをどうして包まう、何

分にも包みきれないかうと知つたなら此唐衣の衣服を拵へる時袂を十分にタップリと裁つて作れと言ふべきで有たものを、

限りなき君がためにと折る花は時しもわかぬ物にぞありける

ある人のいはく此歌はさきのおほいまうちぎみのなり

是はかへり咲の花を折りとつてそれにそへてよんだものと見える　時しもわかぬは時ならずして咲くといふ事ぢやからである、○御壽命が際限もない君に御覽に入れやうためにとて折取る花は　花もやはりいつといふ時節の限りもなくかやうに時もわかずに咲くことでサありますわい」　さて此註は例の通り取るに足らぬぢや、

紫の一もとゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る

是はいづれにも寓意のある歌と見える　題しらずぢやからもとよりわからぬけれども　要するに我が親愛する一人の爲に、其場所に居るすべての人々が悉く親しく思はれるといふ意を寓したものには相違ない　紫は染草で色の麗しいものゆゑに紫色の事をゆかりといふから、こゝでは「紫の一もと」といふに我がゆかりの一人といふ意を寓したのぢや　一もとは武藏野にはへて居る紫草の中の一本といふ意　「草はみながら」は、すべての草のこらずぢや　みながらは皆ながらで殘らずといふこと　此歌からして武藏野に紫の一もとといひ、草のゆかりなどともよむ事となつたのぢや　○わしはあのわしが愛する紫草の一本が立て居るが爲に、廣い武藏野に生しげりてあるさまゝの草はどれも皆殘らず、親しく可愛くサ思ふ事ぢや、

めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりける　なりひらの朝臣

めのおとうとは、妻の妹で、業平の妻の妹　もて侍りける人は其妹を妻としてある人といふ事で、即ち業平の相婿ぢや　うへのきぬは袍で、業平から相婿のところへ袍を贈る時ぢや、

紫の色こきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

此歌は古來の諸説すべて要領を得ぬから、すこし委しくお話し申さう　元來これは伊勢物語にも見えて、それには二人の女兄弟が有て　一人は富貴の人

の妻となり、一人は六位の貧しい人の妻となつて居たが　年の暮に富貴の人から、六位の人に正月着の袍を贈る時の歌としてある　この物語は、作り物語ぢやからもとより信ずべきではないが　しかし此歌の野なる草木とある詞に依て見れば、詞書の袍とあるは六位の袍をいふものと思はれる　袍の色は、古制一位二位は深紫というて紫の極濃い茄子色したもの　三位は淺紫と言うて紫の黒みあるもの　四位は深緋　五位は淺緋　六位は深綠　七位は淺綠　八位は深縹　初位は淺縹ぢやが、段々と亂れて來て一條天皇頃は四位以上は皆黒となり　綠も縹も黒つぽいものとなつたので、此業平の時代も已に深綠の色は黒みが勝たものを悅ぶやうになつたのぢや　偖又こき色といふは紫緋とも色が濃くて黒くみえる程なるをいふ　「目もはるには」は、戀二に「津の國の難波の芦の目もはるに」とあると同じで遠くから見るので　目も遙かにといふに草の芽の張る即ち芽組をかけたぢや　歌の表の意は紫草は苗は闌香に似た由本草にも見えて、芽組みはじめは黑く見えるものぢやから　遠くから見ると野の一般に芽組む他の草木と分別がたゝぬといひ　偖裏の意は、

此贈りまゐらする深綠の袍は、遠くから見ては深紫即ちこき色の袍と分別がたゝぬ程の色であるというて　故に珍重して着用せられよといふ意を言外に示し　しかも紫の色はゆかりといふ事ぢやから紫の色こきといふ詞に、ゆかりの深いといふ義即ち妻の妹の夫といふ意をも寓したのである、○紫草の芽の黑ずんで萠え始めた時は、遠くから見ると、野に芽組むすべての草木とサ分別が立たぬわい、是が表の意で　さて綠が極めて濃く深い君にまゐらする此深綠の袍は、遠くから見ると高位の人の着用する深紫　即ちこき色の袍とサ分別が立たぬ程の色である、(珍重して着用して下さい)といふので　裏の意からは、野なる草木はめもはるに紫の色こきとわかれぬといふ意ぢやが　表の詞つゞきからかやうに言ひまはしたのぢや、

大納言ふぢはらのくにつねの朝臣宰相より中納言になりける時にそめぬうへのきぬのあやをおくるとてよめる

近院右のおほいまうちぎみ

色なしと人や見るらむ昔より深き心にそめてしものを

「色なし」曲がないといふこと、即ち興がないぢや　「深き心に染め」は深厚なる心を其人に致すこと、○(今此白綾を贈りまゐらするを)色がない、曲がないと君は見なさる事でもあらうが　前々より私は深厚なる心を君に致し染めて在つた事でありますものを、

いそのかみのなみまつが、みやづかへもせで、いそのかみといふところにこもり侍りけるを、にはかにかうぶりたまはれりければよろこびいひつかはすとてよみてつかはしける

ふるのいまみち

かうぶりをたまはるは位をすゝめられたをいふ　三代實錄に仁和二年正月七日授從七位上石上ノ朝臣並松從五位下と見えてをる、

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花も咲きけり

やぶとは彌生の義で草木生ひ茂りたるところ　すべてボサ〳〵生茂つた場所をいふより轉じて今では竹藪の事ばかりにいふ事となつたぢや　「やぶしわかねば」はしは強めの助辭で、やぶを分かぬといふ事　日光はいかに草木の生茂りたる處をも一般に照らして物を生育せしむるもの　それを皇恩のあまねく至り及ぶにたとへたのぢや　「いそのかみ」は枕詞なるを、並松が姓にかけて用ひたものぢや　たゞしいそのかみといふ枕詞は、もとふるといふにかゝるものぢやが、今はふるを活かしてふりにしといふにかけたのぢや　「花もさきけり」は即ち位を賜はりたる榮譽をいふ　是におのづから並松の家のみならず石上一郷の名譽ぢやといふやうな意がひゞくは　此ふるの今道は同郷の人にもあらんかと古人の説ぢや、○天つ日の大御光はいかなる草木の生茂りたるぼさ藪をもサ一般に分けへだてなく照らし玉ふものぢやから　此石ノ上の古けた郷里にまで花がマア咲いた事であるわい、(サテ〳〵よろこばしい)

二條の后の東宮のみやすむ所と申しける時におほはら野にまうで給ひける日よめる

なりひらの朝臣

東宮の御息所とは、東宮の御母御息所と申す事なるは春の部で申した通りぢ

や　大原野ノ神社は春日神社と同じで藤氏の氏神ぢや、

大原やをしほの山もけふこそは神代の事も思ひいづらめ

小鹽山は大原山の一名、こゝでは即ち大原野の神にいふ「けふこそは」は、即ち今日東宮御息所の御參詣あるにつきての意　其御參詣の有樣のいかにも盛なるをいふ　神代の事とは、祭神武御雷神が天照大神の神勅をうけ玉はりしをいふ　大原野の祭神が其御子孫藤氏より東宮の御母御息所を出して　今日かく盛なる行裝で御參詣あるを見るにつけ神代の事をも思ひ出される事ならんとぢや、○此大原野の小鹽山の神に於ても、今日の御盛儀を見てこそは、神代の事をも今更に思ひ出して感じ思はるゝ事であらう、

五節のまひ姫を見てよめる

五節の舞姫は毎年十一月中ノ丑ノ日より四日の間行はるゝ事で　四日目の辰の日は豐明節會というて正日ぢや　舞姫は良家の女の嫁せぬ者五人を選む例ぢや　良岑宗貞は僧正遍昭がまだ出家せざりし時の名で　在俗の時此舞姫を見てよんだものぢやから、在俗の時の名をかいたのぢや　百人一首には遍昭といふ名にしてあるが、當年神事には僧の列する事は出來なかつた事であるから謂のない事である、

天つ風雲のかよひぢ吹きとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

「天つ風」のつは、國つ神沖つ浪などのつと同じく名と名との間に入り、之を連結して一名稱とする助辭ぢや　「雲の通路」は、五節の舞姫を、天女に取りなし、天より降り來たものとして　其天上に歸り去るべき雲の通路を吹き塞げといふぢや　姿はたをやかなかたち、立ちまふ形狀についていふ、○空吹く風よ、あの天に登る雲の通路を吹いて閉ぢ塞いでくれよ　此天女のたをやかにしをらしい形を、暫時の程でもよいめて見たいから、

五節のあしたかむざしの玉のおちたりけるを見てたがならむととぶらひてよめる

河原左のおほいまうちぎみ

とぶらひては問ひたづねてぢや　歌に依てみれば、誰もおとしたといはなかつたのぢや、そこでよんだのぢや、

ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

「とへどしら玉」は、問へど知らずとて誰もいはぬといふを、しら玉といひかけたぢや　玉に問ひかけて玉が答へぬといふではない　落ちたる玉に依て落し主をゆかしく思ひて問へども、分らぬ故やがて舞姫殘らずがゆかしくなりたるを、かくいひなしたぢや　もとより誰かれとなくゆかしく覺えたるよりである、○玉の落し主は誰ぢやと問ひ尋ぬれど誰もしらぬ〳〵とばかりで、いはない故に　それなら昨夜の舞姫をば誰彼となく、總代をやゆかしく可愛ゆく思ひませう、

寛平御時にうへのさぶらひに侍りけるをのこども、かめをもたせて、きさいの宮の御方に、おほみきのおろしときこえに、たてまつりたりけるを、くら人どもわらひて、かめをおまへにもていでゝ、ともかくもいはずなりにければ、つかひのかへりきてさなむありつるといひければ、くら人の中におくりける

としゆきの朝臣

うへの云々をのこどもは、殿上人といふこと　大御酒のおろしは、御酒の殘りのお下げになるものをいふ　「おろしときこえ」は、此時代の詞づかひで、大御酒のおろしを賜はらんと願ふ事にいふ　物語文に常にみえて居る詞づかひぢや　「くらうどども」は、后宮の方の女藏人ぢや　此はし書の大意は、寛平の御時に殿上人たち、皇后宮の御方に大御酒の殘餘の御下げになるべきを拜領したいと、酒瓶を使の者に持たせて、願ひにさし上げたりけるを　女藏人ども、瓶を持たせて奉りたるををかしがつて、瓶を后宮の御前に持ち出し笑つてともかくも返事せずしてしまひければ　其使の者が、歸り來つて其由を殿上人にいひければ、此歌をよんで女藏人の人々の中におくりける、といふので　女藏人が笑ひしは、おろしを乞ひ奉るに酒瓶を持たせてさし出す粗忽を笑つたのぢや　此敏行朝臣も殿上人の一人であつたのぢや、

玉だれのをがめやいづらこよろぎの磯の浪わけおきに出にけり

是は催馬樂に「玉だれの小瓶を中にするゑて肴求めにこよろぎの磯に」とあるに依てよんだもので「玉だれの」はをにかゝる枕詞ぢやか　此歌は全く催馬樂の詞に依たもので小瓶を此歌では小龜に取なしていふ　小餘呂岐の磯は相模ぢや、これも催馬樂の詞に依る　畢竟もたせて出したる酒瓶が歸り來らず、御前にさし出したる儘どなりたりと聞きて、其事を催馬樂の詞についてのべたのぢや　○あの玉だれの小龜は歸つてこぬ　どこへ行つた事かと思へばこよろぎの磯の浪をかき分けて沖に出てしまうたわい（アヽつまらん事ぢや）

女どもの見てわらひければよめる　けんげいほうし

かたちこそみやま隱れの朽木なれ心は花になさばなりなむ

○わしの形體こそは實に深山の奥にかくれてをる朽木のやうでもあらうなれども　心をば花にせうとしたなら出來ませう、（何もそんなに笑ふでもあるまい）

かたたがへに人の家にまかれりけるときにあるじのきぬをきせたりけるをあしたにかへすとてよみける

きのとものり

方違は陰陽家から起つたもので、他へ行く時天一神の宿する方角を避けるをいふ　我が行くべき方角に天一神が宿する時は、前夜方角の異なる家に行きて泊り　そこからして我が行くべき地へ行く之を方違というて、此時代は一般に行はれた事ぢや　右の通り只一夜宿泊する丈の事ぢやから、衣服なども、別に用意して出る事もないから、寒い時などは借着をする事などもあるのである　これも借りて着て歸つた衣服を翌朝返したのぢや、

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつりがこくもにほひぬるかな

蟬の羽の衣は、薄き衣服ぢや、夏の事とみえる　「うつりが」は香のかゝりが衣に移るをいふ　此時代は衣服をば伏籠にかけて燒香でくゆらせ薰を移すを身だしなみとしたものぢや、○昨夜お借り申した此衣は蟬の羽のやうに薄い事でありますが　燒きこめた移り香は、偖もマア濃く匂ふ事であり升かいなア、（おたしなみの程感じ入り升）

題しらず

おそくいづる月にもある哉足引の山のあなたもをしむべらなり　　よみ人しらず

「おそくいづる」は、出ぬ程からいふ詞で出かたの遲いといふこと　「足引の」と、のどめていふ枕詞のうちに、これで思ふにといふやうな情がひゝくぢや、〇さて〳〵出かたが遲い月でもマァある事かいなァ　これで思ふに、こちらで月を愛して待つやうに、山のあちらでもをしむ事らしい、(それにとめられてからおそいぢやらう)

わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山にてる月を見て

此歌は大和物語にのせて、書いてある話はもとより作り物語の事ぢやから取るに足らぬ　只旅寢の床で山の月を見て物あはれに感じたをよんだまでのもので、姨捨に意はない、何の山でも同じぢやとの諸說ぢやか　大和物語の話は何さま取るに足らぬものぢやけれど、しかし、「をばすて山にてる月を見て」の口調を、上の句に照らして味はつてみるに　姨捨といふ名はどうしても慰めかねつの詞に關係するものゝ樣に考へられる　「慰めかねつ」は月を見れば心の慰められるものぢやのに、それが慰めかねつといふのぢやからぢや　依て思ふにこれは故郷に殊に深く親慕する姨をとゞめ置いて旅行した人が姨捨山の月を見て　只さへ秋の旅寢に見る月の物悲しきに山の名の姨捨といふにつきて、そゞろに故郷の姨の事を思ひ出してよんだものらしい　姨捨山は信濃ノ國更級郡にある山ぢや、故に更級やといふぢや、〇月を見れば心の慰むものなるに、わしは却つて慰めかぬる事である　此更級の姨捨といふ山に照る月を見るについて、(アゝ故郷のをばさまはどうしてお出でであらう)

なりひらの朝臣

大かたは月をもめでじこれぞ此積れば人の老となるもの

「大かたは」は、離別の部の「人やりの道ならなくに大方は」と同じく一向にといふ意　「これぞこの」は「これぞ彼の」で　これは照る月をいひ、この月は年月の月をいふ　「これぞこの」といひ「これやこの」といふこのは、皆彼のといふ意ぢやといふは鈴の屋先生がいはれる通りぢや　〇一向に月をも賞翫せまい、此の賞翫し

て見る月は、即ちとりも直さず年月の月で　これが積りつもれば人が老人となるものであるから、(賞翫すべきではない)

月おもしろしとて凡河内躬恒がまうできたりけるによめる　紀つらゆき

かつ見れどうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば

是は月によせて躬恒が事をいうたので親友からのからかひぢや、○一方には賞翫して見るけれど、又一方には心うとくも思はれる事かいなァ　月影といふものは、わしの家ばかりでなく、どこへもかしこへも、光のゆかぬところもあるまいと思ふに依て、(君も同じのやうぢや)

池に月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみな底に山のはならていづる月影

○二つとはない物と思うて居つた事ぢやを、山のはでもない水の底に月の影が出て、(サテ〳〵ふしぎぢや)

題しらず　よみ人しらず

天の川雲のみをにて早ければ光とゞめず月ぞながるゝ

「みを」は水脈で、水筋即ち水の中心で流れの早いところぢや　天の川ぢやから雲の水脈といふ　「月ぞ流るゝ」は、月の進行するをいふ　水の縁語で流るゝといふのぢや　月を賞する上から、影の傾きやすいをいふのぢや　○天の川は雪の水脈で水筋のいかにも早いからして、光がちよつとの間もとゞまつて居るといふことなく月がサッサとながれてゆく事ぢや、

あかずして月の隠るゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

○詠めおかないで月がは入つてしまふ山麓の里では、山のあちらの土地がサ戀しくそこに住みたく思ふ事であるわい、

これたかのみこのかりしけるともにまかりてやどりにかへりてよひとよ酒のみ物語をしけるに十一日の月もかくれなむとしけるをりにみこゐひてうちへいりなむとしければよみ侍りける　なりひらの朝臣

此詞書は正義の説に例の後人が伊勢物語の文を略して作り加へたもので、もとは前の歌とつゞけて題しらずであつたらう　其故は、詞書のさまも拙く、又歌も惟喬親王に比していふものとする時は、「山のはにげて」の詞聞えぬものとなるからであると見えてをる　此説まことに從ふべしぢや　前二首と同じく全く月の事のみを詠んだものに相違ない、

あかなくにまだきも月の隠るゝか山のは逃げて入れずもあらなむ

「隠るゝか」の、かはかなで、隠るゝ事哉と歎じ惜むぢや　「山のは逃げて」眞におもしろい詞ぢや　山が逃げるといふ事あるべき事でない、なれども月を惜む情の切なる、其あり得べからざる事をも忘れていふが面白いので　人麿が、妹が門見む靡け此山」といふたと同じぢや、○詠めあかないのに至つて速くもでゝ月が峯に隠れてしまう事かいなァ　どうかあの山のはが逃げて往てしまうて入れないやうにしてもらひたい、

田村のみかどの御時に齋院に侍りけるあきらけい子のみこをはゝあやまちありといひて齋院をかへられんとしけるを其事やみにければよめる

あま敬信

田村の帝は文徳天皇の御事　齋院に侍りけるは、齋院にて御出ありしぢや　慧子は文徳の皇女　御母は從五位上藤原是雄の女ぢや、

大空をてりゆく月し清ければ雲かくせどもひかりけなくに

月に寄せていうたもので「月し清ければ」は行の潔白といふ事　「雲かくせども」は世間に彼是いふ事　「光けなくに」齋院をかへられぬ事をいふ、○大空を照りて行く月がサ清い事であるからして、雲が隠すとすれども其光はどうしても消えない事である」　文徳實録に嗚ゝ齋ゝ内親王慧子を廢する事が見えて居るから一時見合せられたるが竟に廢せられた事とみえる、

題しらず　よみ人しらず

いそのかみふるからをのゝ本がしはもとの心は忘られなくに

「いそのかみ」は、ふるの枕詞「ふるからをの」は、諸説さまゝゝぢやが、げにと思は

れるものがない　とにも角にも地名らしく聞える　ふるからの詞古幹に通ふから、それをうけてもとがしはといふたので「もとがしは」は舊葉で去年の葉をいふ　葉をかしはといふこと日本記にみえてをる　上の句は「もとの心」といふをおこす序で、いそのかみ、ふるとかゝつて、もとゝうけたのがあやぢや、○あの過ぎ去つた古いふるからをのゝ舊葉のもとがしはの、もとの心、即ちむかしの心は、どうしても忘れてしまう事はできない、

いにしへの野中のしみづぬるけれど本の心をしる人ぞくむ

野中の清水は名所ではない　遠鏡の説の通り、昔清水ぢやと評判せられた野中の水が今ではぬるんでしまうたといふのぢや、○昔は野中の清水といふて、よい水と評判せられたものが　今はぬるんではしまうたけれどしかし昔の事を知つて居る人はサ相かはらず汲み取る事である、(人の上でも同じぢや)

いにしへのしづのをだまき賤きもよきもさかりはありしもの

なり

「いにしへの」は、しづの枕詞　倭文布は神代に起つたもの故いふといふ　萬葉に「古のしつ機」とも「古のしづのをだまき」ともみえて居る「しづのをだまき」は、倭文の麻環で、倭文布を織る料の卷子ぢや　「いやしき」のいやは彌しきはしめをさめること　占め修めるを古くしくといふは「しきます國」「ふとしきます」の類で、いやが上にしめ修めるがいやしきぢや　それを賤きにいひかけたので、初二句は「賤きも」をおこす序ぢやが　「いにしへの」が「さかりはありし」といふにひゝき、倭文といふがいやしいといふ賤にひゝいて面白いぢや　是も古來の諸説すべて要領を得ぬから、やゝ委しくお話をいたすのぢや、○いにしへの倭文布の糸のをだ卷は、いやが上にしき卷くものぢやが　其いやしきといふ賤しき者でもよき身分の者と同じく一度はさかりといふ事が必ず有たものである、(いやしいとてさかりといふ時がない事はない)といふので　「いやしきもよきも」と並べていうてはあれど前にしづのとある詞に依て自然といやしきものゝ方の意がつよく聞えるぢや　又「いにしへの」の句が「ありしものなり」にひゝいて、已往の意を重からしめるぢや、こゝが妙處である、

今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを

男山は山城ノ國綴喜郡にある山の名ぢやが　こゝは唯をとこというて、さて隆盛くといはん爲に男山坂行くとかひかけたので　榮ゆることを當時さかゆかんさかゆき、さかゆくというたぢや、榮行くではない　「ありこしといふこに注目すべしぢや」。こは經歷でさやうなる事があり來りしといふぢや、○今でこそかく老衰していくぢも、ないやうになつたけれども　我らも以前男盛りの時分は威勢よく繁昌を加へた時代も有來たつたものであるを、侮りなさるな)ものをの下此意のひゃくを味ふべきぢや、

よの中にふりぬるものは津の國のながらの橋と我となりけり

長柄橋は、仁壽三年絶えたと、三代實錄序の注にあるから、此歌は其以前のものぢやちうと打聽にいうてある、○世間にふるけはてたといふ物は、攝津の國の長柄の橋とわれらが此身との二つであるわい(アヽなげかはしい事ぢや)

さゝの葉にふりつむ雪のうれをおもみ本くだちゆく我さかりはも

「さゝ」は小竹、「うれ」は末で披葉をさしていひ　本は竹の幹ぢや　「くだち」は傾くこと　萬葉に夜降など書けるより降ることゝ思ふは委しくない　此歌は本といふまでが序で、其序をやがて年齢が傾きゆくさまにとりなしたのが面白いのぢや、○小竹の葉に雪が降りつもるまゝに披葉が重くなつて幹が傾くやうに次第次第に傾いてゆくわしが男さかりの年はでァ(どうしたらよから

う)

大あらきの森の下草おいぬれば　こまもすさめずかる人もなし

又はさくらあさのをふの下草おいぬれば

草の事をいうて、人の上の事を諷したのぢや　大荒木森は山城ぢやが、此歌では別に此名稱には意はない、唯其森の下草といふまでぢや　「すさめず」は賞翫せぬこと　「苅る人もなし」は苅取る人のないので畢竟駒がすさめぬから苅り取らぬぢやが　此歌では誰も彼も厭ふといふ意にいふのじや、○大荒木の森の下の草も若草の時こそあれ　古草となつては馬も賞翫せず、苅り取る人もない(人も其通りぢや、年老いてはしかたがない)偖此注も例の通りとられない、

かぞふればとまらぬ物をとしといひてことしはいたく老いぞ

しにける

此かぞふれば」は、「ことしはいたく」といふにかゝる句で、年に敏しをかけたのぢや、○數へて見れば、いうたとてとまらぬ物であるのに年々に敏し〳〵というて、年を重ねて、今年はひどく老人とサ成てしまうた事ぢやわい、

おしてるや難波のみつにやく鹽の辛くも我はおいにける哉

又はおほとものみつのはまべに

是も上の句は辛くといはん序で、難波の地に年久しく奉職したとか、何とか、其地に關係のある人がよんだものらしい　鹽の辛いといふを、甚しいといふ意のからくにかけていうたぢや　甚しい意とは今ヒドクとかキツクとかいふ程の事で、此意に用ひたが土佐日記など、古いものにみえて居る　辛苦して老いたといふではない、ひどく年がよつたといふぢや　「おしてるや」は難波の枕詞　みつは難波に三津の浦といふがある、そこの浦では鹽をやくからぢや、○あの難波の三津の浦で燒く鹽は、しほ辛いが、其鹽のやうに、辛く即ちひどくヤアわしは年よつた事であるわいなア」　注にある大伴のといふも古い調では

あるが、例のとられぬ、

おいらくのこんとしりせば門さしてなしと答へてあはざらましを

此三つの歌は昔ありけるみたりのおきなのよめるとなむ

「おいらく」は、「おゆらく」なるを老らくとかいたを讀誤つてぢやらうと正義にあるがよろしい　「おいらく」といふ詞はないからぢや　さて「おゆらく」はおゆるを延べて一つの體言とし、且其老らくといふを、一つの氣形物のやうにいひなしたのが面白いのぢや　なしは居らぬといふ事で、即ち留守ぢや、○老らくといふ者が來るであらうと知つた事ならば、門をしめておいて留守ぢやと返答して逢はずに歸すべかりしものを、（さて〳〵殘念な事をした）この注も例のとられぬ、

さかさまに年もゆかなむとりもあへず過ぐる齡やともにかへると

「とりもあへず」は、すぐ即ちの意と、年を取りもあへずとを兼ていふ、○逆に即ち

跡の方に年がマア行くやうにしたい、さうしたら年をとるすぐに過ぎ去る年齢が一緒に歸り來る事と思ふから、

とりとむるものにしあらねば年月を哀あなうと過しつる哉

此「あらねば」のねばはぬにといふ意で古言の一格ぢやといふ事は、秋の部の天の川淺瀨しら波のところでお話し申した通りで、こゝも取りとゞめられる物にもあらぬにの意ぢや、○取りとゞめ得られる物でもないのに立てゆく年月を、あゝをしいあゝうい事ぢやと歎いて過した事かいな、歎いても詮のない事ぢやのに、これも古來の說は誤つてをる、

とゞめあへずうべもとしとはいはれけりしかもつれなく過る齡か

年に敏しをかけていふたぢや　年月の經過はとゞめあへず、迅速なるものぢやから、とゞめあへず敏しといふ、それに年をかけていふから、「うべもとしとは」といふぢや、○とゞめきれないで、サッサと立つてゆく、なにさまにも年の事を敏と名づけられた事ぢやわい　さやうにもマア同情がなく過去つて行く年である事かいなア、

鏡山いざたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

此歌はある人のいはく大とものくろぬしがなり

鏡山は近江國ぢや　注は例のとられないが、しかし此歌は、いづれにも近江出身の人が他所に年久しく居てさて故郷の近傍を通過する事が有た時よんだものらしい　歌のさまがどうもさう思はれる、○鏡山といふ名ぢやから、影がうつるであらう　さあそれなら鳥渡立寄つて見て行かう、年久しう他所に居たわしが身は老人となつたかもしれぬから、

なりひらの朝臣のはゝのみこ、長岡にすみ侍りける時に、なりひら宮づかへすとて時々もえまかりとぶらはず侍りければ、

しはすばかりに、はゝのみこのもとより、とみの事とて文をもてまうてきたり、あけて見れば、ことばはなくてありけるうた

母のみこは、桓武天皇の皇女伊登内親王を申す　長岡は山城ノ國乙訓郡此前の都の地　とみの事は急ぎの事といふことぢや、

老いぬればさらぬ別のありといへばいよ〳〵見まくほしき君哉

五一〇

「さらぬわかれは、去り逝れられぬ別といふ事で死別といふ事　死別は必ず老人にも限らぬものぢやが、しかし老人は尤免れがたいものぢやからいふ　之をありといへは老いてはといふ意と説くはわろい　いよ〳〵は常も見たい上に死別の事を思ふからいよ〳〵ぢや、〇年を取つては死別といふ事もあるといふ事ぢやから、只でさへあひたい上に、いよ〳〵あひ見たく思はれる君かいなァ、

かへし

よの中にさらぬ別のなくもがなちよもとなげく人の子のため

なりひらの朝臣

なげくは、こゝでは願ふ事かくあれかしと歎き願ふのぢや　人の子はたゞ子といふこと　人の親といふも只親といふ事なると同じぢや、〇世間に死別といふ事はどうぞないやうにしたいものぢや、千年もあゝどうぞと願ひなげく人の子のために、

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

白雲の八重ふりしけるかへる山かへる〳〵もおいにけるかな

ありはらのむねやな

かへる山は越前　上の句はかへるといはん序で、かへる山は常に雪ふる山ぢやから雪をいうたので　八重ふりしくはふりにふりしくことぢやが、何となく下のかへる〳〵とひびき合ふのが妙なぢや　かへる〳〵もは、年月の立かへり立かへりぢや　それをかへる山とかゝりてかへる〳〵もと調べおろしたぢや　此歌も諸説皆要領を得ない　殊に只雪をよんだものとき、又雪を白髪の事にいふなどは、あまりの事といふの外はない、〇白雪がふるが上にもふりつもるかへる山のかへる〳〵も歳月がつもつてマア年がよつた事であるわいなァ

おなじ御時うへのさぶらひにてをのこどもにおほみき給ひておほみあそびありけるついでにつかうまつれる

としゆきの朝臣

上のさふらひは殿上の侍所　大御酒給ひは御酒下され　おはみあそびは管絃郎ち音樂ぢや、

おいぬとてなどか我身をせめぎけんおいずばけふにあはましものか

「せめぐ」といふ詞諸説區々ぢやが、これは字鏡と、毛詩の注とに依てみれば、咤き恨むといふ意今ぶつくさ言ふといふことぢや、○年がよつたというて何としてかわしが身を不足に思ひ、咤き恨みし事であらう　年よるまで生きてをらなかつたならば今日の此よろこばしい事に逢はう物であらうか、(アヽよろこばしくうれしい事ぢや)

題しらず

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば　よみ人しらず

「ちはやぶる」は、氏にかゝる枕詞それを宇治の地名に用ひたぢや　「宇治の橋守」は宇治橋の番人ぢや　年來宇治橋を通行するに、番人の老人がいつも相かはらず番をして居るさまを見て憐んでよんだ物ぢや　さるを此橋守といふをとや角むつかしく説きなすは論にも足らぬ事ぢや　「なれをしぞ」のしは例のつよめの助字　それをぞとうけたから、汝をが強くなつて、其方を格別にといふやうなる語氣となるのぢや、○あのいつも〳〵見受ける宇治橋の番人よ、其方をサ殊更に不便とわしは思ふ事ぞ、年來さやうにして居るからして、といふので　言外に風雨寒暑といはず老人の橋を守るさまを憐む情があふれてみえる、

わが見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

○わしが見てから以來も年久しくなつた事ぢや　あの住の江の岸に立て居る姫松は昔からは何程の年數を經てきたものであらう、といふので　我みても久しくなりぬと、住の江の云々とのかけ合せで　餘情に、わが見た時から古木で有つたといふやうな意がひゞくが妙なぢや、

住吉の岸のひめ松人ならばいくよか經しとはましものを

○住吉の岸に立て居る姫松が　人間で有つた事ならば、幾年程をか經過せし

事ぞと問はん物を木ぢやから問はれぬがマァ古い事よ）

梓弓いそへの小松たが世にか萬代かねて種をまきけむ

此歌はある人のいはく柿本人まろがなり

梓弓は、いにかゝる枕詞「いそへの小松」は、巖上の松ぢやといふ正義の説がよろしい　巖に根ざした松は、年を經ても成長せずちひさきものぢやから小松といふたぢや、○あの彼處なる巖の上に立つて居る小松は（古木にみえるが）昔何人の時代に萬年の久しきをかけて、種をまいた物であらう、とぢや」　さて此注も例のとられぬ、

かくしつゝ世をや盡さん高砂の尾上にたてる松ならなくに

高砂は海邊の山の總名にもいへど　此歌では播磨の國の地名といふは、序に高砂住吉とみえて居るので明かぢやと古人の説ぢや　松の四時にわたりて花も咲かず、葉もかはらず、立てるさまの常に同じきを碌〳〵として何一つなす事もないにたとへたのぢや、○かやうに何一つ目だつ事もしないでわしは一生をおくつて仕舞ふ事であらうか、あの高砂の山の上に立て居る松であり

もせないのに、

誰をかもしる人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

藤原ノおきかぜ

是も播磨の高砂をいふものらしい　偖誰をかもしる人にせむといふて、高砂の云々とうけた言外に自身の年が老いて、舊友は一人も殘らず故人となつたといふがしられるぢや、○誰をかマァわしが知人朋友とはしませうぞ、誰もするものがない　あの高砂の松も古い事はわしと同じく古いけれどしかし昔からの友とはいはれないぢやのに、

わたつ海の沖つしほあひにうかぶ沫の消えぬ物からよる方もなし

よみ人しらず

比喩の歌ぢや　沫の消えぬを身の消え失せぬ即ち死なぬ事によせ　沫のよる岸のないを、身のよるべ即ち便るところのないによせたぢや　鹽合は潮の滿ち合ふところぢや、○海の沖の潮の滿ち合ふ處に浮びいづる泡沫のやうに

わしが身は消え失せもせぬ物ながら、されば扨て又便るべき方もない（あゝ歎かはしい）

わたつみのかざしにさせる白妙の涙もてゆへるあはぢしま山

「わたつみ」は、海の事にもいひ、又海神の事にもいふが、此歌では海神の事ぢや 偖又浪のたつ時上が白くみえるが頭へ花をかざしたやうに見えるものぢやから浪の事を打任せてわたつみのかざしにさすといふたぢや 後撰に「花さきてみならぬものはわたつみのかざしにさせる沖津白波」ともみえてをる

「ゆへる」は結ひめぐらす事 淡路島の周圍にうちよする波の白さがちら〳〵とうるはしくみえる景色を播磨路から遠く見渡してよんだのぢや、○海神の挿頭にさすといふ眞白な波を以て結ひめぐらしてをる淡路島山（あゝきれいな事よい景色ぢや）

わたの原よせくる浪のしば〳〵も見まくのほしき玉出島かも

「浪のしば〳〵」は、浪のうちしきりてよせくる事、それを度々といふしば〳〵にかけていふ事萬葉にもみえてをる 見まくのほしきは、見ん事を欲するといふこと 玉出嶋は攝津住吉神社の傍で景色のよい地ぢや、○沖の方からよせくる浪のたえずしば〳〵打來る、そのしば〳〵即ちたび〳〵も來て、見んことの欲せらるゝ玉出嶋の景色がマア（あゝどうも何ともいはれぬ）

難波潟しほみちくらしあま衣たみのゝ島にたづなき渡る

「あまごろも」は、雨衣で、簑といふにかゝる枕詞 田簑の嶋は三津濱の下手ぢやといふ、○難波潟に潮が滿ちて來るらしい、あれあのやうに田簑の嶋の方に田鶴が鳴き渡って行くは、

貫之がいづみの國に侍りける時にやまとよりこえまうできてよみてつかはしける

君を思ひおきつの濱になくたづの尋ねくればぞありとだに聞く

藤原たゞふさ

おきつの濱は和泉の國の地名それを思ひおくといひかけたぢや 思ひおくとは、思ひにおきて忘れぬこと 之を思ひ起すといふ事として彼是むつかしくいふはよくない「なくたづの」はたづねといはん爲に、濱にと調べおろし、さ

て鳴くといふをうけて聞くとうけたので「ありとだに聞く」は、ありとばかりでも聞くことを得るといふので、尋ねこざつたなら、ありとだに聞くまいといふ意　即ち先方から音信のないのをいふからかひ詞ぢや、○君を常に忘れずに思ひおきつの濱べに鳴き居る田鶴の尋ねてから來たればこそは、無事でありとばかりでも人づてに聞く事ができる、來なかつたならそれも聞くまい、君からは一向に音信がないから）

かへし　つらゆき

沖津浪たかしの濱のはま松の名にこそ君をまち渡りつれ

「高師の濱」これも地名ぢや　「名にこそ君を」はまつといふ名の如く君を待ちたりとぢや、○沖つ浪が高しといふ高師の濱に立ちてある濱松の、まつといふ名のやうにサ、君をわたしは早くからおまち申して居た事ぢやわ、

なにはにまかれりける時よめる

難波潟おふる玉藻をかりそめの蜑とぞ我はなりぬべらなる

「かりそめ」は、假にしばしといふこと、それを玉藻を刈るといふにかけたぢや難波の浦の風景を愛して當分こゝに居らうかといふをかくいひなしたのぢや、○難波潟にはへてをる玉藻はかりとるものぢやが　其かりそめ鳥渡の間此處の蜑とサわしはなるべかじく思はれる（ハテ景色があまりによいから）

あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける　みふのたゝみね

住よしと蜑はつぐともながねすな人忘れ草おふといふなり

住吉を、くらしよしといふにかけたぢや　忘草は住吉の浦にいひきたりたる草ぢや、○住よしと蜑は告げる事がありとても、長逗留をせらるゝな　人を忘れるといふ忘草がそこには生ずるよしに聞く事であるから、（わしが事をも忘れるかもしれぬ）

なにはへまかりけるときたみのゝ島にて雨にあひてよめる　つらゆき

雨によりたみのゝ島をけふゆけば名にはかくれぬ物にぞありける

住吉にあれば遊女呼ばり今でも名所ぢス

雨がふるによりて田簑の嶋といふ名を頼んで今日行てみれば、名は田簑ぢやが、其名に身は隠れない物でサあつたわい、(此とはりぬれた)といふで　實は田簑の島で雨にあうたのぢやが、かやうにいひなしたのである、

法皇西河におはしましたりける日つるすにたてりといふこゝ

とをよませ給ひける

法皇は宇多法皇、西河は大井河ぢや、

芦たづのたてる河邊を吹風によせてかへらぬ波かとぞ見る

是は延喜七年の九月法皇大井川に御幸ありし時の事で　題は霜鶴洲に立てりといふ事は、此時の紀氏が序で明かである、からして此時の歌いづれも白き意をのべてある　此御歌も此時よませられたものぢやから、よせてかへらぬ浪といふに白き意をあらはさせられたものである、○蘆たづが立て居る川邊の白いのを風が吹くに依つて寄せ來た儘で、立かへらぬ波であるかと見た事である、

中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじめてあそびけるに法皇御らんじにおはしましたりけり夕さりつかたかへりおはしまさむとしけるをりよみてたてまつる

伊勢

中務のみこは法皇の皇子敦實親王ぢやあそびは管絃ぢや、

水の上に浮べる舟の君ならばこゝぞとまりといはまし物を

是は荀子に君者舟也、庶人者水也、とあるに基づいてさてそれに依て、舟をさして君ならばといふたのぢや、○あの池水の上に浮んで居る舟が君であることならば　こゝがサとまりの場所ぢやと申して御引とめ申すべき物を(御かへりになるを)

からことゝいふところにてよめる

眞せい法師

都までひゞきかよへるからことは涙の緒すげて風ぞひきける

唐琴ノ泊は備前ぢや　「ひゞきかよへる」は、名にひゞくこと　下の句は風に波の音が高く聞えるを、唐琴といふ名に依ていひなしたのぢや、○京まで名が高く

ひゝいて居る唐琴といふところに來て見れば　何さま琴といふ名のあるごとく、波の緒糸をすげたてゝ風がサそれを引く事であつたわい、

布引のたきにてよめる　在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる

布引の瀧は摂津の國生田川の水源　此歌は行平須磨にさすらへたる時行きてよんだものぢやらうと古人の説ぢや　布引も須磨も同じ武庫郡で程近いところぢや　「こきちらす」は、遊り散る事、それを白玉といふからこきちらすといふ　こきはしごきぬくこと、玉は糸に貫き通しあるものぢやから、それをしごきぬきちらすぢや　「涙にぞかる」の借るは代るの意　憂の甚しくて涙が盡きる時の代りに借りるぢや　つまり瀧の白玉を空しく散らしてしまはず、拾ひ置いて涙の代用にせんといふぢや、○しごき散らしてなくなるこの瀧の白玉を拾うておいて、世の憂さを歎くが甚しく、泣き盡した時の涙の代りにサすることぢや、

布引の瀧のもとにて人々あつまりて歌よみける時によめる　なりひらの朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

布引といふ名は勿論瀧といふ事も歌の上に見えないのは、實際瀧に對してよんだものぢやからで、後世の題詠の類でないからぢや　以後も此類が多い

「ぬきみだる」はぬきみだらすといふ事、玉は糸に通してあるものぢやから、それを抜き亂らすぢや　「袖のせばきに」は、袖がせばくて包まれもせぬにの意　せばきにと結んだにの辭がいかにも重いので、自然と包まれもせぬにといふ意がひゝくぢや　こゝが妙處なのぢや、○ぬいてかきみだらす人がサどこぞにあるらしい　美しい白玉がちよつとの絶間もなくマア散つてくる事かいなア、此袖のせばくて包まれもせぬのに、

よしのゝ瀧を見てよめる　承均法師

たが爲に引きてさらせる布なれやよをへて見れどとる人もなき

是は吉野川の急流の白くたぎり流れるが布を引延へたやうにみえるからよ

んだものぢや、○誰が着物にせうとて引延べてさらしておく布であらうか年久しい以前から見るけれど、いつまでも取入れる人もない（あのとはりさらしてある）

題しらず　神たい法師

清瀧のせゞの白糸くりためて山分衣おりてきましを

清瀧川は山城の嵯峨山を流れる川、山分衣は隱者法師などが着る衣服をいふ　清瀧川の水が處々の岩根に觸れて屈曲して流れるさまが白糸のやうに見えるから打任せて瀬々の白糸といふのぢや、○清瀧川の水の流れの瀬々の白糸は名の如く清淨ぢやから、繰り貯へて山あるきする衣服を織つて着用せんを、（あゝしておくは惜しいものぢや）

龍門にまうでゝ瀧のもとにてよめる　伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

龍門の瀧、是は大和ぢや　「たちぬはぬ」は、裁ち縫ふ事がならぬといふ事ぢやと正義にあるがよろしい、○裁ち縫はれない衣服を着た人もないものぢやのを何として山の女神は此布をかやうにさらす事であらう、といふので　これに扶桑略紀や懐風藻を引いて、たちぬはぬきぬきし人とは龍門の仙の事をいふ裁ち縫はぬ衣着る人は仙人ぢや、其仙人も今はなきにといふぢやといふは從はれない　もしそれなら「きぬきる人も」といはなくてはならぬもし又昔の仙人の事ぢやからきし人と過去からいふといはば、龍門にはたちぬはぬきぬきし人が有つたのぢや　なきものをとはいはれぬ、故に仙人といふ説は取られない、

朱雀院のみかど布引の瀧御らんぜむとてふむ月のなぬかの日おはしまして有りける時にさふらふ人々に歌よませ給ひけるによめる　たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布をたなばたに我心とやけふはかさまし

「我が心とやは、我がこゝろざしとしてやぢや　誰も持主がない物ぢやから、そ

れを我が七夕に對する志としてといふのぢや　是も古來說き得た說がない、

かさましは貸さんといふ事で手向ける意ぢや　此時代七月七日には七夕を祭りて種々の手向物をした事で其手向物とせようといふのぢや○持主がなくてさらしてあるあの布を、丁度よいからたなばたにわしが手向の心ざしぢやというてや、今日はさし出す事とせよう、

ひえの山なるおとはの瀧を見てよめる

たゞみね

おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黑きすぢなし

「おちたぎつ」は瀧のたぎり落るさま　「水上」といふに皆髪をかけ、年つもりに水のつもるをひゞかせたぢや、○あのたぎつて落ちてくる瀧は水上といふ髪がみな年がつもつて年よつた事らしいなァ　ちつとも黑い筋がない、眞しろぢや

おなじ瀧をよめる

みつね

風ふけどところもさらぬ白雲はよをへて落つる水にぞありける

○風が吹けど同じ場所をすてしも動き去らぬ白雲と見たのは、年來絶えず落ちて居る瀧の水でサ有た事ぢやわい、

田村の御時に女ばうのさふらひにて御屏風の歌御らんじけるに瀧おちたりけるところおもしろしこれを題にて歌よめ、とさふらふ人におほせられければよめる

三條の町

「女房のさふらひ」は臺盤所をいふ、後涼殿の東ぢや　「三條の町」は局名で、紀、靜子、名虎の女で文德天皇につかへまつりて惟喬親王をうみ奉りたる人ぢや、

思ひせく心のうちの瀧なれやおつとは見れど音の聞えぬ

是は瀧の繪に寄せて情をのべたものぢやから戀の歌ぢやが　しかし詞書にある如く、仰事に依てよんだもの故雜に入れられたのぢや　「思ひせく」は、思ふ所をいひあらはさず塞ぎ遏めること心のうちの瀧は情の切なる事　「我はせ

きあへずたきつせなれば」の類情の切なるを常に瀧にたとへていふ、○(此繪は)
憚り謹んで思ひを防ぎとゞめてをる情のにえかへる、瀧なればにや　落るさ
まにはみえるけれども、一向に音が聞えぬ事である、

屏風の繪なる花をよめる　つらゆき

咲きそめし時より後は打はへて世は春なれや色の常なる

花の繪ぢやからわざと花といはぬのぢや「うちはへて」は引續いてぢや、○咲
き初めたりし時からして以後は引きつゞいて世間はいつも春であればにや、
色が平常づつとかはらない、

屏風の繪によみ合せてかきける　坂上是則

かりてほす山田の稻のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

是は詞書の「よみ合せて」とあるに注目すべきぢや、只よんでかいたといふでは
ない書に思ふ心をよみ合せたのぢや　偖其繪は秋田苅るところに鴈の一行
渡るさまなどがかいてあるものらしい歌に依てさう思はれる「かりてはす」
は、稻を刈るに鴈をよせたぢや「こきたれて」一向にといふ意、それに稻をこく
をかけていふ　なき渡るはなき通すこと　渡るといふはすべてこゝからか
しこへかゝる事といふは曾てお話し申した　なき渡るは鴈にかけていふ、○
此繪の鴈イヤ刈りてほしあげる山田の稻は、こくものぢやが　其こきたれて
一向にづっと泣きゃ渡る事ぢや、秋がうくつらいからして、

古今和歌集卷第十七終

古今和歌集卷第十八

雜歌下

題しらず　　よみ人しらず

世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる

有爲轉變しばらくも止まらぬ世の中のさまをよんだもので、感の深い歌である　明日香川は淵瀬變じやすい川と古來いひ來つてをる事はかねてお話し申した通りぢや　「昨日の淵ぞ今日は瀬になる」といひをさめて、さて明日は又どう變るか測られぬといふ事を、あすか川といふ名で餘情にしらしめたのが面白いのぢや、○世の中にある物、何一つ常に變らぬ物がある、皆悉く變るものぢや　あの明日香川を見れば、昨日は淵であつたところが、今日は忽ち瀬になつてをる、明日は又どう變るやらしれぬ、さて〳〵

いくよしもあらじ我身をなぞもかく蜑のかる藻に思ひ亂るゝ

「いくよしも」の「よ」は年といふこと　「し」は強めの助辭で、幾年程もぢや　あらじ

は今から末を推測つていふ詞「蜑のかる藻に」は、蜑が刈り取る藻といふ事で、亂れるさまをよそへていふ、枕詞としたでは、枕詞としたならば、かるもの。といはねばならぬ、○幾年程も生きて居るまいわしが此身であるのに　何としてマアかやうに、蜑が刈取る藻のやうに、思ひ亂れてあれこれ心配苦勞する事であらう、(捨てゝおけばよい筈ぢやのに)

鴈のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

初二の句は晴れずの序で、是も例の物思ひでながめるといふやうな意がひゞくぢや、○鴈が鳴いてくる峰を立てめる朝霧のやうに、晴れないでばかり平常物思ひの絶ゆる事のない世の中の、憂くつらい事よ、

小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあれば先歎かれぬあなうよの中

「事しあれば」のしは強めの助辭　事しあればと強くいうた語勢に自然事がある度々にといふやうな意がこもるぢや　そむくは世をそむくこと、即ち世を遁れるぢや　「そむかれなくには、世を遁れる事も叶はぬのにの意ぢや、○さうぢやというて世を遁れる事も出來ないのに事がサある度々に、いつでも〳〵先第一に歎息せらるゝ事ぢやあゝ憂い、いやな世の中ぢやというて、

かひのかみに侍りける時京へまかりのぼりける人につかはしける

都人いかにととはゞ山高みはれぬ雲井にわぶとこたへよ

雲井は離別の部にある雲井と同じく遠方といふ事　それを甲斐は山國ぢやから山高みはれぬ雲井とつゞけたぢや、○京の人々が、わしの事をどうして居るかと問うたならば、山が高くて常に晴れ〳〵せぬ雲の中の遠方の地によわつて居ると答へて下さい、

をのゝさだき

ぶんやのやすひでがみかはのぞうになりてあがた見にはえいてたゝじやといひやれりけるかへりごとによめる

小野小町

「みかはのぞう」は三河ノ椽で地方官ぢや　此時代の地方官は守介椽目ぢや　「あ

がた見」は田舎見物といふこと、

わびぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

「わびぬれば」は世に住み佗ることを萍にいひかけたぢや　萍の根は岸につながれぬから、根を絶えといふ住居を定めぬにたとへたぢや　「誘ふ水」は即ち康秀がかく誘ふにたとへたぢや、しかしかくはいへど行はしなかつた、○世に住みわびはてゝしまへば、身を憂いものに思うて、浮草の根をつながれないでさそふ水に任せるやうに住居を定めず、誘ふ人があるならば、何處へなりと往かうとサ思ひます、

題しらず

あはれてふことこそうたてよの中を思ひはなれぬほだしなりけれ

「あはれてふ」は「あはれといふ」で「あはれてふことは人の同情をよせてくれる言」「うたて」は前に申した通り、ケシカランといふ意、今日いふ非常にぢや「ほだし」は繋絆　馬の脚を繋いで逃去らぬやうにする繩　ふもだしの約それより起つて物に繋がれて離れられぬ事にいふ名、今きづなといふことぢや、○あゝおいとしいと人のいふてくれる詞がサ、非常に此世の中を思ひすてられないきづなとなる事であるわい、

よみ人しらず

あはれてふ言の葉ごとにおく露は昔をこふる涙なりけり

此「あはれてふ」は、自身があはれといふので、即ち昔を戀うて、歎息する言　言の葉といふから、草木の葉になぞらへて露とあやなしたぢや、○あゝ〳〵と歎息する其言葉のそれ〳〵におく所の露は昔を戀しく思うてこぼれる涙であつたわい、

よの中のうきもつらきもつげなくに先しる物は涙なりけり

○世間の憂いといふ事も、つらいといふ事も告げ知らせもせぬのに、先第一番に之を承知するものは涙であるわい

よの中は夢か現かうつゝとも夢ともしらずありてなければ

世上すべての事皆目前に過去々々とばかり過去つて、夢の如く、有るが如くで有るにあらざるをいうたもので、まことに感の深い歌ぢや○世の中といふものは夢である事か、又は正眞である事か　正眞である事とも、又夢である事とも一向わからない　あるやうに見えてあるでないからして、

よの中にいづら我身のありてなしあはれとやいはむあなうとやいはむ

「いづら」は俗に、どれどこにといふ意と打聞にある通り「我身のありてなし」は今あるも後には忽ち無き無常をいふ「あはれ」は世のはかなき上についていひ「あなう」は身の脆さ上よりいふ、○世上にどれどこにわしが身はある事ぞわしが身は、全く有つて無いものぢや、あゝはかないものといはうか、あゝ愛いなさけない事といはうか、

山里は物の淋しき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり

こゝにいふ世は、都下などの事繁き地をさしていふ、○山家住居は物さびしいといふ言草こそはあれ世間の憂く煩はしいよりは、暮しよい事であるわい、

白雲のたえずたなびく峰にだにすめば住みぬる世にこそありけれ　これたかのみこ

○白雲が常に絶間もなく棚引いて居る、かやうな高山の峯にでも、住んで見れば住み通される世の中でサあるわい、人はどうでも暮されるものぢや、親王は文徳天皇第一の皇子でまし〳〵て當然皇太子にも立たせらるべき御身が墨染の袖にやつれさせられて、かゝる御詠があつた事を思へば、恐ながら御いとはしくて涙がこぼれる、

しりにけむ聞きても厭へよの中は波の騒ぎに風ぞしくめる　ふるのいまみち

此歌は諸説無常の事をいふよしに説いてあるが、しりにけんきゝてもいとへの句世を厭ふことゝはどうしても聞えない、是は時事を諷したものらしく、初二の句は即ち其事をば知りたる事でもあらうで、それは聞いても厭はしいといふのぢや　下の句波の騒ぎは其事の本をいひ、風ぞしくめるは他のそれ

に力を合せ加ふるをいふ　しくは吹きしくで、吹き加ふる　めるは其樣子を
ぼやかしていふ辭ぢや、○定めて知つた事でもあらう聞いても厭はしくいや
に思はれる事ぢや　「此世の中は波の騷ぎが起つて風がサそれに吹加はつた
具合ぢや」といふので　初二の句の語氣は、秘密の事がやゝ世にひろくもれた
をいふものゝやうぢや　或は前の御歌の次にのせられたも意味がある事か
も知れぬ　此よみ人は、前の石上並松が云々との詞書のあると同じ人で　並
松の事は仁和二年、ぢやから或は文德の御時などによんだものかもしれぬ、

そ　せ　い

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

是も諸説皆要領を得ない　初二句は反語で、何處にか世を厭ふ事が得られる、
決して得られない、といふこと　心こそ云々は肝腎な心が、いまだまどひを免の
れぬ、といふぢや、○何方にか世を厭うて避けるといふことが出來やうぞや、決
して出來ない　肝腎な心がサ野にも山にもすべてまどうて居るさまぢやか

ら、」といふので　畢竟心の惑が全く晴れなければ、世を避ける事は出來ない、形
ばかりが世を避けたとて詮のないといふのぢや、

よみ人しらず

よの中は昔よりやはうかりけん我身一つの爲になれるか

諸説昔よりかくうかりしか但し又我身云々と兩端をあげて問ひかくる意と
いふが　さらば「昔よりかくうかりける」とか「うかりつる」とか問ひかけにいは
なくてはならぬ　「昔よりやはうかりけん」では、昔よりやは何としてうくあら
うぞとの意なるは明かぢや、○此世の中といふものは、何として前方から憂い
ものであらうぞや　只わしが身一つのためばかりにかう憂いものとなつて
居る事か、（さても〳〵）

よの中を厭ふ山べの草木とやあなうの花の色に出にけむ

草木はこの歌では只植物といふ程の意にいふ　色に出では色に咲くといふ
程の事即ちうの花とさくをいふ　但し正義に赤尾可官の説として、あなうつぎ
といふ一種のうつぎが有て、其花は溯紅ぢやとある　此説に依れば普通のう

の花の白いに對へて薄紅の事を、色に出づといふ事となるが　果してさやうの種類が古くよりある事であるか、調ぶべきぢや、○世の中を厭うて遁れて來た山中の植物ぢやとてやら、あゝ憂い事ぢやといふ憂の花が色にあらはれて咲く事でもあらう、（わしが世を厭うて遁れ來たと同じく）

三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

「山のあなた」は山の奥ぢやといふ打聞の説がよい　みよしのは深山で奥がしられぬ山と當時いはれて居た事ぢや、○深山といふ名にひゝいて居る吉野山の奥にどうぞ家をはしいものである　世の中が憂く煩はしい時の隱れ場所とせやうからに、

世にふればうさこそまされ三吉野の岩のかけ道ふみならしてむ

「かけみち」は嶮阻の道のこと今いふガケぢや　ふみならすはふむを強くいふ詞ならすといふに意はない　この歌では山に遁れ入ることにいふたのぢや○世に住んで居れば、うく煩はしい事が段々とサ增加してきてどうも堪らぬ、あの嶮阻な吉野山の岩のがけ道を踏み分けて引込んでしまはうかい、

いかならむ岩ほの中にすまばかは世のうき事の聞えこざらむ

「岩ほの中は」巖窟と限るでもなく、深山を指すといふでもなく、只深山幽谷人迹の絶えた住居を理想上からいふのぢや　是は隱遁などした人が、更に親族などの憂ふべき事が有てよんだもらしい、○「どのやうな岩窟の中に住居して居た事ならばゃァ、世上のうく歎かしい事が聞えて來ない事であらう」　古本に「すまばかも」とあるがよいと、先哲もいはれた、

足引の山のまに〳〵隱れなむうきよの中はあるかひもなし

「山のまに〳〵」は、山まかせといふ事で、何の山くれの山とさゝず、どの山でも行きあたりといふぢや　是も諸説ときゝ得ない、○どれこれといはず行きあたりの山に入つてしまはう　こんなういう煩はしい世の中には居つても詮がない事ぢやから、

よの中のうけくにあきぬ奥山のこのはに降れるゆきやけなま

し

「うけく」は愛きといふ事　「奥山のこのはにふれる」は、ゆきやけなましといはん爲の序で　木の葉に降る雪は殊に消えやすきもの、それに我がこゝろざす奥山といふをそへたのぢやと、正義にあるがよろしい　「ゆきやけなまし」は行き隠れやうといふを雪の消えるにかけていふのぢや　「けなまし」は影をかくすこと死ぬといふ説はわろい、○世上のうゐのにもはやあきはてた　あの奥山の木の葉に降りつもる雪は消えるが、わしも奥山へ行き消て、影をかくさうか、

おなじもじなきうた　　ものゝべのよしな

世のうきめ見えぬ山路へいらむには思ふ人こそほだしなりけれ

○世中のうきめ、即ちいやな事が見えない山中へ引込まうとするには、いとしいと思ふ人がサきづなとなつてつながれるわい、（からどうも引籠られぬ）

山のほうしのもとへつかはしける　　凡河内躬恒

世をすてゝ山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらむ

此時代「山の法師」といふは延暦寺の僧の事ぢや　さて僧を世すて人といふから、延暦寺の僧をさして「世をすてゝ山に入る人」というたぢや、○世を捨て去つて山に入つた人が其山に入つての上でも、やはり世が憂くうるさい時は、今度はどこへ行きなさることであらう、

物思ひける時いときなきこを見てよめる

今更に何おひいづらむ竹の子のうきふししげきよとはしらず

や

此幼兒は自身の子をいふ　「今更に」は今から更にで幼き子の無我無心なるさまに對していふ詞　「おひいづ」は成長の意生出の意で今更生れてこねばよいといふではない　子を竹の子によせていふから「ふししげし」といひ「よ」といふ皆其縁語ぢや、○今更に何として成長する事であらう　此竹の子の、うくつらいふしが、しげく多い世の中とはしらぬ事か、（いつまでもかやうに無我無心であるべきのに）

題しらず　　よみ人しらず

よにふれば言の葉しげき吳竹のうきふしごとに鶯ぞなく

「言の葉しげき」といふから「吳竹の」とかゝつてさて「うきふし」とうけ、憂しといひて歎くを詞の緣から、鶯ぞなく」といふたのぢや　よといふも竹の緣語ぢや、○世にたつて居ればなんぢやのかんぢやのと世間の人の口の葉が多くて、いやな事のある度々に　あゝ憂い事とサ歎息するといふを吳竹のしげみに鶯がなくにかけていうたのぢや、

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべらなり

ある人のいはくたかつのみこのうたなり

是は晉の載凱の竹譜に非木非草とあるに依るもので、木にもあらず草にもあらぬは竹といふにかゝる序　さて竹のよとうけて、世のはしといふをおこしたのぢや　「はし」は「はした」といふと同じで、どちらつかずの意　これが序の木にもあらず草にもあらぬ竹といふにひゞきあふが面白いのぢや　つまり二重に序を取り、初めの序を活用してひゞきに取つたのである　これも舊說は

要領を得ぬ、○「木でもなく、又草でもない竹の、それには節があるが　其竹の節でない、世のはしたもの、どちらつかずといふやうに我身はなりさうである」

駐の高津內親王は、桓武の皇女で後選集に見えてをる御歌がらにこれもよく似てをるが　注は選者の書いたものでないから取られぬと古人もいはれた、

我身からうきよの中と歎きつゝ人の爲さへかなしかるらむ

是は何ぞ事に當つて感じた事からよんだものぢやらうと古人もいはれた、○我身の上から此世の中をすべて憂いつらいものと歎くまゝに人の身の上までも悲しく思はれるであらう、（さうでないかもしらねど）

おきの國にながされて侍りける時によめる　たかむらの朝臣

思ひきやひなの別におとろへて蜑の繩たぎいさりせむとは

「思ひきや」は豈圖らんやで、思ひかけぬこと　「ひなのわかれ」はこゝは隱岐の流されの事を一聯の名詞としていふもので即ち謫居の事ぢや　「衰へて」は零落の事、衰弱といふではない　「繩たぎ」は繩をたぐること、漁業をするありさまを

いふ、○眞に思ひもかけぬ事である　かゝる遠國謫居の地に零落して、蛋の群に入て網繩をたぐりなどして漁業をすべき事ならんとは　是は京の友人などに言送つた歌ぢやらうと古人も申された

田村の御時に事にあたりて津國のすまといふところにこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣はしける　在原ノ行平ノ朝臣

事にあたるは勅勘を蒙る事ぢやが　行平が罪を得た事記錄に見えぬから、是は一時かしこまりの事が有て、須磨に謹慎して居られた事でもあらうと先哲の說ぢや　宮の內に侍りける人とは、即ち宮中奉仕の人の事ぢや、

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶと答へよ

「わくらばに」はとりわけてといふ意の輕きものより轉じて「たまさかに」といふやうなる詞となつたもの　「もしほたれ」は蜑のしわざをいふ、○もしたまさかにわしが事をどうして居ると問ふ人が有たならば　此須磨の浦に、蜑と一つ

となつて藻鹽をかきたれ、かきたれして、よわつて居ると答へて下さい、

左近將監とけて侍りける時に女のとぶらひにおこせたりける返事によみて遣はしける　をのゝはるかぜ

「とけて侍りける」は解官せられたのぢや　其時女のところから見舞をいうてよこした返事といふのぢや、

あまびこの音づれじとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

「あまびこ」は「山彥」と同じで木靈をいふ　已に紀氏が新撰和歌には山彥とある「あまびこの」は音の枕詞で、それを活かせて返事をせぬといふ事に用ひたのぢや　山彥はこちらで聲を立てれば、必ずかなたで應ずるものぢや　なれども今は山彥のやうには返事をせまいと思ふとぢや　「我か人か云々」は憂に沈んで彼我の分別もたゝぬ事　此時代茫然たるさまを「我かのこゝち」とも「我かのさま」ともいうた事、物語文に多くみえて居る　「身をたどる」は自分の身がわからぬといふ事○山彥の音づれ即ち返事をばせまいとサ今は思ふ事であるハ

我であるか人であるか、自身で自身がわからない折からぢやから、

つかさとけて侍りける時よめる

平さだふん

うき世には門させりとも見えなくになどか我身の出てがてにする

「うきよ」はもと「憂き世」といふからいはれた詞ぢやが　後には「浮世」といふやうに只「世」又は世間などいふ意にも用ひられたので、こゝも「世間」といふ事ぢや「出でがて」は「出で難氣」で出でかねるぢや　「出で」は門を出ること、世に成り出づる即ち出世の事とをかけていうたぢや○「世間には門を設けてそれを閉切て置くやうにも見えないのに　何としてわしが身は出でかねてかやうに解宮までもせられる事ぢやらう」といふで　官を解かれるは出世の道を失ふ事ぢやから、出がてといふと遠鋭の説がよろしい　但し歌の解はよくない　又上の句言外に世間には榮達する人もあるにとの意がひゝいて聞えるこゝが妙なのである、

ありはてぬ命まつまの程ばかりうき事しげく思はずもがな

○在りとげられず死ぬるはかない命を待つてをる程合だけは、かやうに憂いいやな事を多く思ふ事のないやうにしたいものぢやナア、

みこの宮のたちはきに侍りけるをみやづかへつかうまつらずとてとけて侍りける時によめる

みやぢのきよき

帶刀は春宮坊の侍衛の士ぢや　「宮仕つかうまつらず」は不奉公、即ち勤務緩怠ぢや、

つくばねのこの本ごとにたちぞよる春のみやまの蔭をこひつゝ

是は「筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭に增す蔭はなし」の歌に本づいてよんだもので　「この本ごとに立ちよる」はあちらこちらへ歎願する事「春の眞山」に春宮をかけたのぢや、○筑波嶺の、このもかのもの木の本毎にわたしは立ちサ寄る事であります　春の眞山の蔭を仰ぎ慕ひ仰ぎ慕ひまして、

時なりける人のにはかに時なくなりて歎くを見てみづから
のなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる
清原ふかやぶ

「時なりける」は、時を得て勢力の一つくをいひ、「時なくなり」は、時を失つて勢力の去るをいふ、當時の詞ぢや、

光なき谷には春もよそなればさきてとくちる物思ひもなし

榮枯の事を花の開落によせ、花は春咲くものぢやから、春というて花をきかせたのぢや　「光なき谷」は日光の至らぬ谷といふこと、それに天恩に浴せぬ意を寓せたぢや、○日光の至らない谷に在ては、春をもよそで知らずにをる事ぢやからして、花の咲いたの、速く散つたのというて、喜びかなしむ心配もない事ぢや、

かつらに侍りける時に七條の中宮とはせ給へりける御返事に
伊勢

かつらは地名で桂の里ぢや　「とはせ給へりける」は御昔信を給はつたのぢや、

久方の中におひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる

「久方の中」といふについては色々説があるが　打聞に中は月の誤ぢやといふ説がよい　月といふ字は筆がかすれると中の字によまれるものぢや　それを寫し誤つたので、久方の月に生ひたる里といふので桂の里の事をいふ　月に桂といふ事は秋の部でお話し申した通りさて中宮を月にたぐへて申したのぢや、○あの大空に照り渡る月の中に生じてをるといふ桂の里に居る私であり升から　其光りばかりをサ、ひとへに御頼み申上げやうと思ふ事であり升、

きのとしさだがあはのすけにまかりける時に、うまのはなむけせむとて、けふといひおくれりける時にこゝかしこにまかりありきて、夜ふくるまで見えざりければ遣はしける
なりひらの朝臣

「けふといひおくれりける」は、即ち送別として招いだ日をいふ、

今ぞしる苦しきものと人待たむ里をばかれずとふべかりけり

初二の句は今ぞ苦しきものと知るといふ意ぢやが　かやうにいうた語勢に自然に今ぞしみ〴〵知る人を待つは甚苦しいものといふをといふやうな意がひゞくぢや　里は場所といふ程の事「かれず」は疎くなくといふこと、○今（わしは君を待つ身となつての上で）サ始めて苦しいものぢやといふを知つた、（今からは）人を待つてをらう場所をば、疎くないやうに問ふべき事であるわい、これたかのみこのもとにまかりかよひけるを、かしらおろして小野といふ所に侍りけるに、正月にとふらはむとてまかりたりけるに、ひえの山のふもとなりければ、雪いとふかゝりけり、しひてかのむろにまかりいたりてをがみけるに、つれ〴〵としていと物かなしくて、かへりまうできてよみておくりける

「まかり通ひける」は、業平が平生参上したのぢや　「かしらおろして云々」は惟喬親王が御出家なされて小野といふ地に御住居なされたといふぢや　小野は山城ノ國愛宕郡ぢや　正月に云々は、業平が年賀に参上せんとした處が小野は叡山の麓ぢやから雪が深く降積つて居たといふ事　それを強て踏分けて御庵室に参上して拜賀を申上げたぢや　「つれ〴〵としては、ひつそりして物部かのさま御在俗の時賜はしかりし正月のさまに對していふ詞ぢや　此詞書も彼是論があるが今は姑く其儘でお話し申す、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

「雪ふみわけて」の句にかく深く積る雪をふみ分けて、遙鄙な山里にといふやうな意が自然とひゞくのぢや、○つひふと忘れては、夢ではないかとサ思はれます、實に思ひもよらぬ事であります　さばかり降り積つた雪を踏みわけて遙鄙な山里に君を御見上げ申さう事とは、（さて〴〵悲しい歎かはしい事であります）

深草の里にすみ侍りて京へまうでくとてそこなりける人に

よみておくりける

年をへてすみこし里をいでゝいなばいとゞ深草野とやなりなむ

○年來住居し來つゝた此里を出で去つて行つた事ならば　只さへ深草の里といふこゝが一層草の深い深草野となるでもあらうか、

かへし　　よみ人しらず

野とならばうづらとなきて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

上の句は野と荒れゆかば憂しと佗びて明し暮さんといふを鶉によせていうたのぢや　さて鶉といふから下の句はそれをうけて、狩に假をかけて狩ぐらゐ丈には、即ち假初にちよつとぐらゐは、君も來ぬ事はあるまい來るであらうからというたのぢや、○さやう、もし野と荒れはてゝゆくならば、わたしはあゝ憂いこと即ちうづらと鳴き歎いて、月日を送りませう　鶉狩即ち假初ちよつと位は、君も來ぬ事もあるまいから、(それ丈でもなぐさめにして)

題しらず

我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつの蜑となりにき

此歌はある人むかし男ありけるをうなの男とはずなりにければ難波のみつの寺にまかりてあまになりてよみて男につかはせりけるとなむいへる

「なにはのうら」は輕侮の何にいひかけたので、今も、なに彼がなどいふ詞ぢや　浦は憂らをかけたぢや　怨ならず我を厭はしげにするやうにみえるが、うらにみえるぢや　浮海布に憂目、三津に見つ、蜑に尼をかけたぢや、○わたしを君がなにあれがと、難波のうらのねんごろならずいやがるやうにあつたから、浮海布の憂目を見つといふ三津の濱の蜑即ち尼となつてしまひました、といふぢや　注は例のとらずぢや、

かへし

難波潟うゝむべきまも思ほえずいづこをみつの蜑とかはなる

難波潟は、此歌では浦とうけて、うらむの枕詞とし、それに何の意をひゞかせ、又三津の蜑といふに應せしめたぢや　まは間節で恨むべき節ぢや、○難波潟の何の恨むべき節も覺えない事ぢやに、何事をみて三津の濱の蜑いや尼となつた事であるか、(さて〳〵わからぬ事ぢや)

今更にとふべき人も思ほえず八重葎して門させりてへ

是は前のかへしの歌とは別ぢや　歌に依て考へるに前の歌の又のかへしか、さらずは久しく疎かつた人とか　又は何か節のあつた人が、問ひ來るべき由を人を以ていひ來つた時よんだものでもあらうか、詞書のおちたものでもあらう　八重葎は葎が繁く生ひはびこつた事　葎は蔓草で「門させりてへ」は門させりと言へといふこと　葎が生ひ繁りて門の戸を閉ぢ切つたと言へぢや、○今更今日となつてわしが家に問ひ來るべき人はありとも思はれない　わしが家は葎の八重十文字に生ひ茂つて、門を閉ぢ切つてしまうてをると言はれよ、

友だちの久しうまうでこざりけるもとによみてつかはしける

水の面におふるさつきの浮草のうき事あれやねを絶えてこぬ

みつね

上の句はうきといはん序　さて浮草といふからねをたえてと其縁語でいうたぢや「さつきの浮草」は五月頃は其最も生ひはびこる時節ぢやからぢや

「うき事」は、心憂く思ふ事ぢや　「ねをたえてこぬ」は、根からちよつとも來ぬといふぢや、○水面に生ひはびこる五月頃の浮草の其うきといふ心うく面白からず思ふ事でも、あるのぢやか、根からちよつとも見えぬ事よ、(わしの方では覺えもないに)

人をとはて久しう有りけるをりにあひてうらみはれければよめる

普通本にはあひうらみとあるが、古本にあひてとあるがよいと古人も申された、

身をすてゝ行きやしにけん思ふより外なる物は心なりけり

「身をすてゝ」は、問ふべき身を捨てゝぢや　下の句の思は心の作用ぢやけれど此歌では思と心とを姑く別物としていひなしたぢや　思ひどほりにゆかぬは心といふが思ふより外なる心ぢや、○お尋ね申さうとする身をうち捨てゝ他へ行てしまうた事かしらん(かう御無沙汰になつたは)思ひどほりにゆかないものは、心でありますわい、

むねをかのおほよりが、こしの國よりまうてきたりける時に
雪のふりけるを見て、おのが思ひはこの雪のごとくなんつも
れるといひけるをよめる　五五八

君が思ひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

○ハテ雪とつもるやうな君が思ひであるならば、信用ができぬ事ぢや　それなら春から後には消えてなくならうと思はれるから、

かへし　宗岳大頼

君をのみ思ひこしぢの白山はいつかは雪の消ゆる時ある

思ひ來しを越路にいひかけたのぢや　白山は雪を專によむ山で、不二の雪の消える日も、此山は消えぬ由にいはれてをる山ぢや、○君をばかり戀しいと思うて越えて來た越路の白山はいつの時か雪の消えると言ふ日がありませう、年中消える事はない、

こしなりける人につかはしける　きのつらゆき

思ひやるこしの白山しらねども一夜も夢にこえぬ夜ぞなき

君が居るについて思ひやる越のしら山は　もとよりしらぬ山ぢやけれども、唯の一晩でも夢の上で越えぬ晩はない、（君を夢にみるについて）

題しらず　よみ人しらず

いざこゝに我世はへなむ菅原やふしみの里のあれまくもをし

菅原の伏見は大和ノ國添ノ下ノ郡ぢや　此歌は古いすがたにみえるから桓武の都うつしの頃、菅原の里によせある人が住むとて詠んだ物ぢやらうと打聞にみえて居る　「我世はへなむ」は、我が生涯をおくらうとの事　「あれまくもをし」は「あれむもをしで、さびれゆくが惜しいといふぢや、○サァそれならわれらが生涯は、此處におくる事とせやう　此菅原の伏見の里がさびれて行かう事がマア惜しい事であるから、

我庵はみわの山本戀しくはとふらひきませ杉たてる門

此歌を三輪の神詠といひ、或は三輪の神をよむものならんなど種々むつかしくいひなすは皆とるに足らぬ　是は三輪の山本に新たに家を設けて引移つ

た人が、遠方にある親友などのところへよみ送つたものと見て、よく聞える歌ぢや、〇わしが住居の庵室は三輪山の麓である　戀しくなつかしく思はるゝならば尋ねておいでなさい、杉が立つてをる門ぢやから直にわかる、

きせん法師

我庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

此歌も諸説いづれも説き得ない　「都のたつみ」は、京より東南の地で都近くの場所との意なるは諸説の通り　「しかぞすむ」は、然く住むで、其處に即ち住むといふ事ぢや　「世をうぢ山」は、世を憂きものと厭うて、といふを宇治山にいひかけたので　世を憂きものと厭うて宇治山に入つたと世間の人はいふといふが下の句ぢや　さて上の句をしかぞ住むと切つて、下の句に世をうぢ山とうけた語調上下の間に自然と、然るに」といふ意がひゞいて　然るに世を憂きものと厭うて宇治に入つたと世間の人はいふなり、といふ事となつて　「人はいふなり」の語調に、世をうきものと厭ふならば、何ぞ都近くの宇治に住まんやといふ意がひゞくのぢや　こゝが此歌の妙味で、即ち秋の月の曉の雲にあへるが如きところぢや、〇わしが庵室は京の東南の程近い地、そこに即ち住んでをる　然るに世を憂きものと厭ひ避けて、宇治山に入つたかのやうに、世間の人はいふ事ぢや　（世を厭ふなら何で京近の宇治などに住まうぞや、遠く深山幽谷の間に身を遁るべきである）というのぢや　前にも申す通り「然ぞ住む」といふて「人はいふなり」とうけた、かけ合せの風調をよく味はつて見るべしぢや

どうしても、かやうに説く外はない　そも〳〵喜撰の歌とて世に殘るものは甚少い中に、此集に取られたは唯此一首ぢや　此一首でさて序の六歌仙の中の一人に選まれたとすれば此歌は餘程の妙味がなくてはならぬ　從來の解のやうに、京近の地で世上の憂き事が聞え來る山なれどもの意と見ては何の味もないのみならずさらば「世をうぢ山と人は言へども」といはなくてはならぬ　又さう見ては上下のかけ合はせに妙もなく、餘韻もなく、此一首で歌仙の列に入るなどの事は思ひもよらぬ事である、よく味ふべきである、

よみ人しらず

あれにけりあはれ幾よの宿なれや住みけん人の音づれもせぬ

是は廢宅をよんだものぢや「いくよの宿」は、幾年を經過した家といふこと
「音づれもせぬ」は即ち廢宅ぢや、○荒れはてたわい、ァ、ャァ幾年立つた家ぢや
らうもと住居したらう人の音信不通である、

ならへまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるを聞き
てよみていれたりける　　よしみねのむねさだ

わび人の住むべきやどゝ見るなべに歎きくはゝる琴のねぞす
る

「わび人」此歌では身のよすがなく獨り住のやもめにいふ「歎き加はる」は、琴の
音は歎きの情を催すものゝ由古來言ひ來たつてある、それに戀慕の情の添ふ
をいふ、○よすがなき人の、つれ〴〵と心細く暮らすすらしい宿ぢやと見うける
まゝに歎きの情を一際加へ添へる琴の音がサする事ぢや、

はつせにまうづる道にならの京にやどれりける時よめる
一　條

人ふるす里をいとひてこしかどもならの都もうき名なりけり

是は契つた人の心のかはりし頃の歌ぢやらうと古說ぢや　人ふるす里とは
京をいふ　即ち心がはりせし人の住居する地ぢや　下の句は、奈良の都もふ
るさとといふからして我が爲にはやはりうき名ぢやといふのぢや、○人をふ
るす即ち、我を忘れる人の住む里を厭ひすてゝ、此地に來つた事であれども
奈良の都もふるさとゝいふから、やはり人をふるすといふ憂き名のある地で
あつたわい、

題しらず
よの中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞ宿と定む
る　　よみ人しらず

是は住宅の事をよんだものぢや、○此有爲轉變して已まぬ世の中に於て、何れ
を指定して我が家ぢやとする事ができやうぞ　只行き當つて止まる所を
宿所と定めるばかりの事ぢや、

逢阪の嵐の風は寒けれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる
「ゆくへしらねば」は雲水などの、いづ方と行方も定まらぬをいふ、○逢阪山に吹

き渡る嵐の風は寒いけれど、されればとてどことめざす行先も知らぬ事ぢやから、難義ながらも寐る事である、

風の上にありか定めぬ塵の身はゆくへもしらずなりぬべらなり

輕い身の事を塵の身といふから、やがて塵に寄せていふたものぢや「風の上に」は風に任せてといふ程の事上は輕くみるぢや、○風に任せて居場所も定めぬ塵のやうな輕い身は、つひにどこへどうなつたか、分らぬものとなりさうなあんばいぢや、

家をうりてよめる　伊勢

飛鳥川淵にもあらぬ我宿もせにかはりゆくものにぞありける

「瀬に」に錢をかけたのぢや　錢は字音で淵をらにといふと同じぢや、○あすか川の淵でもないわしが家であるが、それもけふは瀬に、イヤ錢かはつてゆく事でサあるわい、

つくしに侍りける時にまかり通ひつゝごうちける人のもとに京にかへりまうできてつかはしける　紀友則

故郷は見しごともあらず斧のえのくちし所ぞこひしかりける

此は述異記の故事に據たもので　晉の王質といふ人が、木こりの爲に信安郡の石室山といふに入つて、童子が碁をうつのを見て居た處が　まだ勝負がつかぬうちに斧の柄が朽ちたから、驚いて歸つて見ると、其間に多くの年が立て故郷の人々は皆代がかはつて居たとある　それに據たもので見し如に、見し碁といふをかけ　數年の間に京のさまの變つたを、いひ、筑紫の地の事を、斧のえの朽ちし所といふたぢや、○(此度立歸つて見れば)故郷の京の地は以前見た如くもなく(すべてが變りはてました)斧のえが朽ちた所即ち碁をうつた筑紫がサ今更戀しく思はれる事ぢやわい、

女ともだちと物がたりしてわかれて後につかはしける　みちのく

あかざりし袖の中にや入りにけんわがたましひのなきこゝちに

する

「魂のなきこゝち」は、其人の事のみを思うて、何事も手につかぬをいふ　さてたましひの玉といふから袖の中に入るといひなしたのぢや、○あかす名殘が惜しかりし故、別れる時君が袖の中に入てしまうた事でもあらうか　別れて後はしが魂はどうもないやうな氣もちがする、(只うか〳〵とばかりして)

寛平御時にもろこしのはうぐわんにめされて侍りける時に、東宮のさふらひにて、をのこどもさけたうべけるついてによみ侍りける

ふぢはらのたゞふさ

「もろこしのはうぐわん」は遣唐使の判官といふ事ぢや　遣唐使には大使、副使、判官、主典といふが有たのぢや　めされては任せられたのぢや、

なよ竹のよながきうへに初霜のおきゐて物を思ふころかな

なよ竹はなよゝかなる竹で細竹ぢや　長節竹といふ説はとるに足らん　萬葉になゆ竹ともあるで明ぢや　上の句はおきゐての序で、序中のよながきといふを、おきゐてにひゞかせたがおもしろいぢや　「物を思ふ」は、此時代の遣唐使は今の航海とは大ちがひで、航海の日數ももとより定められぬ上に、風浪の虞も測られぬ事ぢやから、甚心配の事であつたのぢや、○細竹のよの長い竹の葉に初霜の、イヤ其初霜ではないがおき居て此長い夜にいろ〳〵心配する時分でもあるかいなァ、

題しらず

よみ人しらず

風ふけばおきつ白波たつ田山よはにや君がひとりこゆらむ

ある人此歌はむかし大和國なりける人のむすめにある人すみわたりける、此女おやもなくなりて家もわろくなりゆくあひだ、此男かふちの國に人をあひしりてかよひつゝ、かれやうにのみなりゆきけり、さりけれどもつらげなるけしきも見えてかふちへゆくごとに男の心のごとくにしつゝいだしやりければ、あやしと思ひて、もしなきまにこと心もやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜かふちへいくまねにてせん

さいの中にかくれて見ければ、夜ふくるまで琴をかきならしつゝうち歎きて此歌をよみてねにければ、これをきゝてそれより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

此左注は紀氏が書いたものぢやなどいふ説もあるが、つまり例の後人が書加へたものといふは、疑のない事ぢや　殊におきつ白波を盗賊の事とするなどは附會の説で、初二の句は立田山といふをおこす序ぢや　但し是も見る所に本づいたものかも知れぬが、題しらずぢやからわからぬ　とに角古調で何となく感の深い歌ぢや、○風が吹けば沖の方に白波が立つ、あゝその立田山を夜の淋しいのに、君が只ひとりで越えなさる事ぢやらうか、(何かなければよい、さて〳〵　按じられる)　さて左註は已にお話し申すやうに取られないものぢやが、只其うちの詞のふと解しがたいもの丈をお話し申さう　「河内の國に人をあひしりて」は、河内の國で他の女と知り合となつたのぢや　「かれやうにのみなり」は、かれ〴〵になるので、疎くなるのぢや　つらげは恨めしげといふこと「こと心もやある」は異心がある事かとで、他人に通ずることでもありはせぬかといふ事ぢや、

たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく

「ゆふつけ鳥」の明かでないことは戀の部でお話し申しておいた　但し此歌に依て思ふに、當時祓除する時、木綿を付けたる鶏を立田の神に奉納する風習などが有て、それに依てよんだものか　即ち立田山に鶏の聲がしきりにするを聞いて、何人が祓除をして木綿を付けた鳥を納めた事かといふを、やがてゆふつけ鳥とつゞけ、さてをりはへてなくとうけたものぢや　「をりはへて」は引返し〳〵續く事、○何人が祓除をして木綿つけ鳥を納めた事か、その鳥があれあのやうに、立田の山に引かへし〳〵つゞいてなく事である、

忘られむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへもしらぬ跡をとゞむる

是は旅立つ時などの歌ぢやらうと打聞にあるがよろしい　濱千鳥は文字の事　文字は鳥の跡を見て作り初めたと支那でいふから、文字の事を鳥の跡とも濱千鳥ともいふのぢや　偖此歌では濱千鳥といふをゆくへもしらぬといふ枕の如く用ひ　跡をで文字といふをきかせたのでゆくへもしらぬは、他所

に行く事ぢや、〇月日がたてば人に忘られてしまうものぢやが　其時分思ひ出せとてサ濱千鳥の行方も分らずなつてしまう跡に手跡を殘しといめおくのぢや、

貞觀御時萬葉集はいつばかりつくれるぞととはせ給ひければ　ぶんやのありすゑ

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ

初二の句は、ならといはんため「ならの葉の」は、名におふといはん序ぢや「ならの葉の名におふ宮」は奈良の都七代が間を廣くさすと、打聽の說の通りぢや〇十月中時雨が降りおいた楢の葉の其ならといふを名に負うた宮の御時代に集められた古歌がサ是でござりますといふので　遠鋭に時雨にふりおけるとは珍らしと評したは、至極面白い　正義の解は通らぬ說ぢや、

寛平御時歌たてまつりけるついでに奉りける　大江千里

芦たづのひとりおくれてなく聲は雲の上まで聞えつかなむ

鶴鳴二九皐一聲聽二于天一といふを履んで、官位の進まぬを鶴に寄せて歎いた歌ぢや「ひとりおくれて」の句上下の語勢で、多くの鶴にといふ事が言外にひゞき、又多くの人におくれて歎くといふ事が知られるが妙なのぢや　五句は「聞え着かなむ」で繼がなむではない、〇芦田鶴の只ひとり多くの群におくれてなく聲、即ち私が官位が人々におくれて歎く聲は、雲の上まで聞達して御きゝにも入るやうにいたしたい、

人しれず思ふ心は春霞たちいでゝ君が目にもみえなむ　ふぢはらのかちおん

「春霞」はたちの枕詞で例のそれを活かして目にもみえなむといふのぢや、〇人にもしらさずして願ひ望んで居る私の心はあの春霞のやうに立あらはれて、お上の御目にも見えふれるやうにしたいものぢや、

うためしける時に奉るとてよみておくにかきつけてたてまつりける　伊勢

山川の音にのみきくもゝしきをはやながらみるよしもがな

「山川の」はおとにきくの枕詞　さて其縁語で身を早に、水脈速をかけたのぢや　山川は水脈の流れの速きものぢや　「身を早ながら」は身を以前の儘でぢや　「もゝしき」は大宮にかゝる枕詞であるが、轉じて大宮といふ事にも用ゐるやうになつたぢや　さて是は伊勢が宮づかへをひきて後の歌ぢや、○今日ではもはや山川の流の音にばかり聞いて居ます宮中を、水脈速いな身を以前の儘ながらで見るやうにもいたしたいものであります、

雜體

短歌

雜體はざつていとよむ　長歌、旋頭歌、俳諧歌の類、さまゝの體のものを修めてあるからいふ　偖こゝに短歌とあるは、もとは長歌と有つたを寫し誤つたものといふこと、古來先哲の論で明白ぢや　是は全く草書で書いた長の字を反と寫し誤り、さて萬葉に短歌を反歌とも書いてあるから、後に寫す人が更に短の字としたものぢやらうと古人の説ぢや　又此反歌の反の字は段の字の草書から出て、反別、又は一反、二反など常に專ら用ひる字ぢやから　短歌と書くべきを字畫を略して書いたもので正しい反の字ではないと是も古人の説ぢや、

題しらず　よみ人しらず

逢ふことの　まれなる色に　思ひそめ　我身は常に

あま雲の　はるゝ時なく　不二のねの　もえつゝとはに
思へども　逢ふことかたし　なにしかも　人を恨みむ
わたつみの　沖をふかめて　思ひてし　思ひは今は
いたづらに　なりぬべらなり

是は戀の歌ぢや　まれなるは容易にないといふこと　それを思ひ初を染めといひかけるから、まれなる色といふのぢや「あま雲の」「不二のねの」共に枕詞ぢやが、互に縁のある詞ぢや　偖不二は常にもえる山ぢやから、もえつゝとはにの枕としたぢや　とは常磐で常といふこと「わたつみの沖」は、深めてといはん爲の詞、沖は水の深いものぢやからである、○逢ひ見るといふ事が、容易に出來ぬのにその人を思ひ初めてから、わしが身は常平生に心が晴れるといふ時なく、思ひにもえて常にどうかと思へども、どうしても逢ふ事が叶はぬ、(なれどもわしの方で思ひ初めた事ぢやから)何としてか人を恨むべき　されば折角深く思ひ込んだる思ひも、今日では無益のものとなりさうである、

ゆく水の　たゆる時なく　かくなはに　思ひみだれて
ふる雪の　けなばけぬべく　おもへども　えふの身なれば
なほやまず　思ひはふかし　あし引の　山した水の
こがくれて　たぎつこゝろを　誰にかも　あひかたらはむ

「ゆく水の」「かくなはに」「ふる雪の」「皆枕詞ぢや　「えふの身」は彼是の説もあるが、闕浮の身即ち人界の身といふ事といふが先よいやうぢや　人界の身なれば、思ひに任せぬぢや　「足引の山下水」は、木がくれといはん序　「こがくれて」は人にしられぬこと　「思ひはふかし」「たぎつ心」皆水の縁語ぢや、○いつともいはず絶間なく、思ひみだれて、いつその事に、死ぬなら死んでしまひたく思ふけれども人間界の身であるから、思ふに任せず　この深い思ひの世間の人にしらせないで、にえたぎる胸のうちを誰にかゞはなさうぞ、

色にいでば　人しりぬべみ　すみぞめの　ゆふべになれば
ひとりゐて　あはれ〳〵と　なげきあまり　せんすべなみに
庭にいでゝ　たちやすらへば　白妙の　ころもの袖に
おく露の　けなばけぬべく　おもへども　猶なげかれぬ

春がすみ　よそにも人に　あはれと思へば

「すみぞめの」「白たへの」「春がすみ」、ともに枕詞　すみぞめの云々は、即ち白畫は人目をさけてぢや　「たちやすちへば」は、たちもとほることと即ち徘徊ぢや　さて「よそにも人にあはれと思へば」の句は此歌ではどうしても聞えない、是は全く「あはれと思へば」のれ。はすの寫し誤りで、此事は後に御話し申す　逢ふ事の叶はぬは勿論よそ乍らも逢れないと思へばで、此句で初句の逢ふ事の云々を結んだのぢや、○色に顯はさば人が知るであらうと思ふから人目にたゝぬ夕暮となれば只一人となつて、あゝあゝと歎息しても、歎息しきれず　たまりかねて庭におりたち、あちらこちらと立ちめぐれば、きものゝ袖におく夜露の　其露ならで我命も、いつそ消えよと思ふけれども、(消もうせないで)やはりなげかれる事であるよ　(逢ふ事のならぬは勿論)よそながらでも、あの人に逢はれぬ事と思へば、といふのぢや　此歌結句「あはれと思へば」にては首尾が應せぬ、又文脈もふと見ては紛はしく見える所もあるなどから二首を一首に寫し誤つたものかなどいふ説もあるが　結句は須の草假名をれと寫し誤つたものに相違ない　須の草假名はれとよく似て居るから誤つた例が往々ある　又此時代三十一字の歌は大に進んだ事ぢやが長歌は之に反して退いたのである　是は平安朝となつてからは、三十一字の歌が專ら行はれて長歌は一向に行はれなかつたからの事で　即ち此卷にをさめられたもの僅に五首といふでも、其行はれぬといふ事を證すべく又此五首の歌がらに依て其退いたといふ事は明かである　故に唯此一首についてかれこれいふべきではないのである、

ふるうた奉りし時のもくろくのそのながうた

「ふるうた」とは、序に「萬葉集に入らぬふるきうた、みづからのをも奉らしめて」とあるをいふもので、即ち此古今集の事ぢや　目錄とは四季賀戀離別哀傷の類をいふのぢや、

ちはやぶる　神の御代より　くれ竹の　よゝにもたえず
あま彦の　音羽の山の　春がすみ　思ひ亂れて
さみだれの　空もとゞろに　さよふけて　山ほとゝぎす

なくごとに　誰もねざめて　からにしき　立田の山の
紅葉ばを　見てのみしのぶ　神なづき　しぐれ〳〵て
冬のよの　庭もはだれに　ふる雪の　猶きえかへり
としごとに　時につけつゝ　あはれてふ　ことをいひつゝ

「ちはやぶる」「くれ竹の」「あま彦の」「からにしき」いづれも枕詞ぢや　さて「ちはやぶる、云々世々にもたえず」は「年毎に、時につけつゝ」といふにかゝるのぢや　故に「云々世々にも絶えず、年毎に、時につけつゝ、天彦の、云々猶きえかへり、あはれてふ、ことをいひつゝ」としてみれば、文脈が明かに立つのぢや　或はさやうにあつたのが、錯亂した事かもしれぬ　つゝの重なるも耳立つやうでもあるから、さてそれはとに角、文脈は右の如くぢやから其文脈でお話は申すのぢや　「思ひみだれて、さみだれの」は口調からつゞけ、さて「空もとゞろに」というて、「天彦の」にひゝかせたぢや　「庭もはだれに」は、庭もまだらにといふこと　「きえかへり」は、あはれといふにかゝる、深くあはれといふ意　偖天彦のは春、さみだれのは夏、唐にしきは秋、神な月は冬ぢや、○はるか昔の神代以來世代世代引續き年々歲々其時節につけ　音羽の山の春霞を見ては思をいたましめ　山時鳥がさよふけて「五月雨の空もとゞろに鳴く聲には誰彼となく皆ねざめてあはれを催はし　唐錦を織り出す立田山の紅葉を見ては感を動かし　いつしか冬の空となり日毎々々に打時雨るゝと思ふまもなく、さえわたる冬の夜の、庭もまだらに降りつもる雪につけても　猶消えかへり、感情をいたましめ、思ふ心をいひあらはし、いひあらはしつゝ、

君をのみ　ちよにと祝ふ　世の人の　思ひするがの
ふじのねの　もゆる思ひも　あかずして　別るゝ涙
ふぢごろも　おれる心も　やちくさの　言の葉ごとに
すべらぎの　おほせかしこみ　まき〳〵の　中に盡すと
いせの海の　浦のしほがひ　ひろひあつめ　とれりとすれど

「君をのみ、千代にと祝ふ」は賀　「世の人の云々、もゆる思ひも」戀　「あかずして、別るゝ涙」は離別と羇旅とをいひ　「ふぢごろも」は哀傷　「八千草の言の葉ごとには雜と雜體とをいひ　さて織れる心といふに編叙の意をかけ、藤衣といふ

をうけていひ　八千草の言の葉ごとに統ぶるといふを天皇といふにかけたのぢや「中に盡すと」は「中に盡さんと」といふ意　此詞づかひは萬葉にも多くみえてをる　「伊勢の海の浦の鹽貝」は、ひろひあつめの序で　鹽貝は鹽海の貝といふこと、是におのづから廣く民間にあさるといふ意がこもる　「とれりとすれど」は、次の短き心思ひあへず、と受けて、さて數句の序を隔てゝ結句の「漏りやしぬらん」にかゝるのぢや　或る説に「漏りやしぬらん」は、日夜此撰定にのみ力を用ひて私を顧みぬ事を述べたので　我宿は荒れ果てゝ雨のもるといふまでぢや、歌の漏れたといふではないとあるが　さうすると「此とれりとすれど」といふ詞のくゝりがつかず、何の事とも分らぬものとなる事ぢやから論に足らぬ説ぢや、○君をばかり只ひたすらに、千代にましませとぞ祝ふ　世間の人が戀に苦しき思ひをするがの國なる不二の嶺の、常にたえずもえ渡る思ひも　又名殘盡せず惜しまれて別をつぐる涙の袖の藤衣、其經緯に織るが如く、とざまかうざま、思ひを盡し編める心も　八千草の種々樣々なる言葉々々に、引總べ載せて　天皇の仰の旨を畏み守り選びもらすといふことなく、それぞれの卷の中にとり盡さんものと　廣く民間のものをもあさりて、拾ひ集め、撰び取りたりとはしたれども、

玉のをの　みじかきこゝろ　思ひあへず　猶あらたまの
年をへて　大宮にのみ　久かたの　ひるよるわかず
つかふとて　かへりみもせぬ　我宿の　忍ぶ草おふる
板間あらみ　ふる春雨の　もりやしぬらむ

「玉のをの」はみじかきの枕詞　短き心は拙き心といふ事、即ち不才短慮ぢや　「あらたまの」枕詞　大宮は即ち此編輯所承香殿をいふ　「久方の」は枕詞　「あらたまの」より「ふる春雨の」までは、此選定の事について專ら力を盡し、私事を顧みざりし事をもて、序としたものでぢや　文脈は「取れりとすれど短き心思ひあへず、猶もりやしぬらむ」といふのぢや　古くは漏れん漏るゝといふを漏らん漏りともいふたことぢや、○私どもの拙き思慮より、思ひもよらず猶やはり、（以下序此撰定の爲に年月永く官中にばかり晝夜を分たず奉仕するとて　一向に捨ておきたる、我が家の荒れたる軒には忍ぶ草が、生ひはびこり　板間の荒く

なりゆきたる場所からは、降る春雨の漏るが如く、(こゝ迄序)漏れたものがあるかもしれませぬ、

ふる歌にくはへて奉れるながうた　　壬生忠岑

ふる歌は前と同じく此古今集にをさめた歌をさしていふのぢや　くはへてはそへてといふ事ぢやから此古今集を奉る時に奉つたのが、前に目錄とあると同じ時に奉つたものぢや、

くれ竹の　よゝのふること　なかりせば　いかほのぬまの
いかにして　おもふ心を　のばへまし　あはれむかしへ
ありきてふ　人まろこそは　うれしけれ　身はしもながら
言の葉を　天つ空まで　聞え　あげ　末の世までの
あとゝなし　今もおほせの　くだれるは　ちりにつげとや
ちりの身に　つもれることを　とはるらむ　これを思へば
いにしへに　くすりけがせる　けだものゝ　雲にほえけむ
こゝちして　ちゝのなさけも　おもほえず　ひとつ心ぞ
ほこらしき

「くれ竹の」「いかほのぬまの」は、ともに枕詞「のばへまし」は「のべむ」といふこと「むかしへ」は昔方で方は行方肩方のへぢや　「ありきてふ」は「ありたりといふ」ぢや　「あとゝなし」あとは模範の意末の世までのあとは後世の模範といふのぢや　「ちりにつげとや」是は此集漢文の序に、詞人才子慕風繼塵とみえたものと同じく、是は後漢書に出てをる字で趾を繼ぐ事ぢや　塵の字は說文に馬があるいて土をあげるものと有てチリホコリの事にも、又アトといふ事にもなる字で　繼塵はあとをつぐ事之を當時ちりにつぐというたとみえる　又はちり乎と乎を草假名に書いたを、丹の草假名に誤つたのかもしれぬ　「ちりの身」は輕き身といふ事、塵につげのちりとは義はかはるが口調の上から重ねたのぢや　藥けがせる云々は、神仙傳にみえた故事で　八公安といふ人仙藥を服して飛び去つた後其餘つた藥を鷄と犬とが嘗めて、同じく天に昇り　鷄は天に鳴き、犬は雲に吠えたとある、それをいふので　是は昔は普く人に知ら

れた事とみえて萬葉にも雲にとぶ藥はむともなどみえてをる　これは卑官にして此仰を蒙ることの榮譽にたとへていふ　ひとつ心はこゝでは心ひとつといふほどの意、○神代以來代々によみおかれたりし歌といふものがなかりし事ならば後のよの人は、何としてか、心に思ふさまざまの感をいひのぶる事を得やう　あゝそのむかしのよ、ありたりといふ、人まろといふ、人こそは、うれしくも慕はしき事である　身は卑官でありながら、よみ出したる歌を天つ空なる、高き雲井の上までも聞え上げ後世迄の模範となし　今もかゝる仰言の下れるものは、其跡に繼げとてや、數ならぬ塵の身に古來積り來れる歌を撰定せしめらるゝ事であらうか　此事を思へば往古仙藥を嘗めたる犬の、雲中に吠えたりといふものゝ如き感が有て、何等の情況も忘れ果てゝ、心一つがせ誇らしく面目有つて思はれる、

かくはあれども　照るひかり　ちかきまもりの　身なりしを
誰かは秋の　くるかたに　あざむきいでゝ　みかきより
とのへもる身の　みかきもり　をさ〳〵しくも　おもほえず

こゝのかさねの　中にては　あらしの風も　きかざりき
今は野山し　近ければ　春は霞に　たなびかれ
夜はうつせみ　なきくらし　秋は時雨に　袖をかし
冬は霜にぞ　せめらるゝ　かゝるわびしき　身ながらに
つもれる年を　しるせれば　いつゝのむつに　なりにけり

「かくはあれども」より忠岑自身の事を歎き申すのぢや　昔は自身の勤勞の事を自身と奏聞して官位昇進を願ふ事が有つたので、是も此集撰定の事に依て年來の沈滯を歎き申すのぢや　「照るひかり近きまもり」は、近衛をいふ　忠岑前官は左近衛番長であつたのぢや　秋のくる方とは右衛門府生となるをいふ　左近衛は東右衛門府は西で西は秋の方位ぢやからいふ　「あざむきいでゝ」はすかしいだすといふ事、しかし事實歎きすかしたといふではない、輕く見るべきぢや　「みかきより云々」は近衛は宮中の守衛、右衛門は一般の守衛ぢやから御垣より外重守る身の御垣守といふのぢや　宮城の廓にありて一般の守衛に當るを御垣守といふ　「長々しくも」は「はか〳〵しくも」といふこと　「こ

丶のかさね」は九重で宮城をいふ、文選から出た詞ぢや　九重の名より、嵐の風もきかずと、其さまのゆたかなりしを形容していふ　「今は野山し云々」是亦近衛に對して右衛門府をいふ、外衛なれば野山に近いといふのぢや　「積れる年を云々」は、勤務に累ねし年をかぞへれば五六、三十年になつたといふ事ぢや○かやうではあり升けれども、私は初め照る日の光に近き衛り、即ち近衛番長の身でありましたを　何人かの計らひで秋の來る方角即ち右衛門府生といふに釣り出して宮城より轉じて外廊を衛る身の御垣守となりし事、はかゝしくも思はれませぬ　九重の宮城の中に在ては、嵐の風の音をだに聞く事なかりしに　今は外廊に在て、野山にサ接近して居る事なれば、春は霞の中にさまよひ夏は蟬の如く鳴きて日をくらし　秋は時雨に袖を貸せて、乾く間もなく、冬は霜に攻め犯されて、常に寒さに苦しむ　斯の如く詫しく悲しき身ながらも勤務に累ねし年を算へみれば、五六の三十年となつた事であり舛わい、

これにそはれる　わたくしの　老の數さへ　やよければ
身はいやしくて　年たかき　ことの苦しさ　かくしつゝ
ながらの橋の　なからへて　たつ波の
波のしわにや　おぼゝれむ　をしければ
こしの國なる　しら山の　なりぬとも
音羽の瀧の　おとにきく　かしらは白く
君が八千代を　わかえつゝ見む　老いず死なずの　くすりもが
なにはの浦に　さすがにいのち

「これにそはれる」、これは勤務年數をいふ　即ち右にいふ勤務年數に添ふ、自身の年齢といふが、これにそはれる私の老の數ぢや　「やよければ」これは此外には更にみえぬ詞ぢやから、古來色々説が多い　「彌益ければ」といひ、彌餘計なれば」といひ、「彌過ぎれば」といふなどは取られない　「彌多ければ」のおほが約まつてよと轉じたといふ説が先よいやうぢや　或は「彌往ければ」で上にやといふからゆがよと轉じたものかもしれぬ、とに角老の數の重なるとか、增すとかいふ事ぢや　「身はいやしくて、年高き」、卑しきと高きとを對へて、年を經て官の進まぬを歎くので、此何上の「身は下ながら云々天つ空」といふにひゞくのぢや　「ながらの橋の」は枕　「なにはの浦にたつ波の」は序　「おはゝれむ」はおぼれむと

いふと同じぢや　波といふからおぼれるとうけたので空しく老はてることの「さすがにいのち」以下、一轉して修結するもので「越の國なる、白山の」はかしらは白くの序　かしらは云々上のわたくしの老の數、云々を修む　「音羽の瀧の」は枕詞「老いず死なずの藥もが」は、上の藥けがせる云々に應じて、わかえつゝの詞で一篇を總括したのぢや、○これに引添て私自身の老の年數さへ重なり加はる事故に、身はひくゝ卑しくして、年ばかりが高いと申す事が苦しく難義な事であり升　かやうの有樣で、空しく存生して、何のしいだす事もなく、唯いたづらに老果てる事でもありませうか　(かくはかなき身なれど)しかしながらに、命といふものは、猶をしく思はれるに依て、猶此上に老を加へて頭は白くなりはつるまでも、かね〳〵遠く音に聞きをる、不老不死といふ藥を得て、之を用ひたく思ふ事である　君が經玉ふべき八千代の末を、若がへり若がへりして見奉らんと思ひますから、

君が代にあふ坂山の岩清水木がくれたりと思ひけるかな

長歌では此度の仰を蒙るを歎ぶについて、身の沈滯を歎き此短歌では此仰を

蒙るに依て、從來の愁眉をも開くよしにみなしたので、こゝが面白いところなぢや　逢坂山のあふを君が代に逢ふといひかけて、此度の寵遇にあふ事をいひ　偖石清水は古くより逢坂山にいふものぢやから逢坂山の石しみづとさら〳〵とつゞけ、さて木がくれたりとの詞をおこしたぢや　石清水の繁みの蔭に隱れるを、こがくれというて、身のしられないで沈滯する事によせたので「思ひけるかな」は其を過去よりいふ詞で、思うた事であつたわいナァといふ意　言外に思ひちがうてといふ意が生ずる詞ぢや○かやうに有がたい君の寵遇に逢ふといふ逢坂山の岩清水の木がくれたり、即ち世にしられず沈滯せりとばかり思うた事であつたわいナァ、(思ひちがひであつたサテ〳〵)

冬のながうた　凡河内躬恒

ちはやぶる　神な月とや　けさよりは　くもりもあへず
うちしぐれ　紅葉とともに　ふるさとの　よしの丶山の
山あらしも　寒く日ごとに　なりゆけば　玉のをとけて
こきちらし　あられみだれて　霜　こほり　いやかたまれる

庭のおもに　むら〳〵みゆる　冬くさの　うへにふりしく
しら雪の　つもり〳〵て　あらたまの　年をあまたも
すぐしつるかな

五九〇

「ちはやぶる」は枕詞「うちしぐれ」は一本、六帖、家集とも「初時雨」とありて其方がよいと打聞にいはれた通りで、うちしぐれでは用言となつて紅葉と共にふるといふにつゝかない「ふるさとの」は吉野といふにかゝる詞　山あらしは山おろしならんと是も打聞の説がよい　「玉のをとけて、こきちらし」は、霰のふるさま　「霜こほり」は、霜が氷りてぢや、霜と氷と二つではない　「つもり〳〵て」は、雪のつもるといふを歳月のつもる事にかけたのぢや　さて此歌は冬といふ題ぢやから、初冬より起つて歳暮の感迄を詠じたもので、年をあまたも、すぐしつる哉」は即ち歳暮に臨んでの感ぢや、○いつかとはや十月になつた事ぢやかして　今朝からはくもりもはてず、初時雨が、染盡した紅葉と共に、ふる里の、吉野の山から吹きおろす、山おろしの風も　毎日々々と寒くなりてゆくまゝに、はやつなぎたる玉の緒がとけゆきて、こきちらしたる如く、霰が降り亂れ霜は氷つて　いやますゝ　かたまりゆく庭の面のこゝかしこ、むら〳〵と枯殘りたる冬草の、上にしろ〳〵ふりしく雪の、つもりつもりて、いつのまにやら、歳月多くも過しきたる事かいなァ、

七條后うせ給ひけるのちによみける　伊勢

七條の后のかくれさせられたは、延喜七年の六月ぢや　此古今集の奏進は延喜六年の事ぢやから、此歌は後に加へられたものぢやらうと古人の説ぢや、

おきつ涙　あれのみまさる　宮のうちは　年へてすみし
いせの蜑も　船ながしたる　涙の色の　こゝちして　よらむかたなく
かなしきに　くれなゐは　われらがなかの　秋の紅葉と
時雨にて　人々は　おのがちり〳〵　なりはてゝ　とまるものとは
わかれなば　頼むかげなく　君なき庭に　むれたちて　空をまねかば
花すゝき　なき渡りつゝ　よそにこそみめ

「おきつなみ」はあれのみまさるの枕　后宮かくれさせられて、宮中の有様さびれ行くが、あれのみまさる宮のうちぢや　年へてすみし云々上の「沖つ波」の詞をうけて海の縁語でいふ　年へてすみしいせの海は、伊勢自身の事をよせていふ　伊勢が自身の名をよみ入た歌は後撰にも二首みえてをる　此人は七條の后に仕へた人ぢやから、年へてすみしぢや　「舟流したる」は舟を失うた事、即ち身の寄處を失うたをいふ　「涙の色のくれなゐ」は血涙、「われらが中」は后宮奉仕の人々についていふ、畢竟紅の色の涙はわれらが中の時雨といふ事ぢやさて時雨といふから、「秋の紅葉と」とうけておのがちり〳〵をおこしたぢや、「頼むかげなく」は身のよるべなき事、是も紅葉といひ、ちり〳〵といふ縁語　さて此おのがちり〳〵は、一周年を經て宮中に奉仕せし人々悉く退散するをいふ　「とまるものとは」は、殘り止まるものとてはといふ事　「初鴈の」はなき渡りの枕　それを花すゝきといひ、空を招かばといふ縁語でおいたのぢや、○かくれさせられてより、おひ〳〵とさびれのみまさりゆく宮中は、年來住來たりし伊勢の海も、其世を渡るべき船を失ひなくしたるやうに　便るべき方もなく、

悲しく歎かしきに、血に泣く涙は即ち我がともがらの時雨の雨にて、御はてとなりて秋の紅葉の如く　宮中の人々、おのがちり〳〵さま〴〵に立別れゆく事ならば、よるべよすがもなくなりはてゝ　殘り止まるものとては、只前栽の花すゝき、君ましまさず淋しき庭に、むらがり立ちて、空しく空を招くであらうを　はつ鴈がねのそれにはあらで、なき渡りつゝよそながらニヵみる事であらう、といふので　よそにみるといふは、宮中にあつた身の退散してよそより見るといふのぢや、

旋頭歌

是は「せどうか」とよむので五七七五七七の句法のものをいふ　旋頭とは昔片歌といふものが有つて、此片歌といふは五七七のものである、其二首を合せて一首としたものぢやから、頭を旋らすといふのぢや　混本歌といひ、又雙本歌といふも皆此旋頭歌の事ぢや　萬葉には旋頭歌が六十餘首あつて中には句法の異なるやうなものも見えるが、それは後世よみ方を誤つたので、旋頭歌といふは五七七五七七のものを云ふ　後世旋頭歌又は雙本歌として此句法に

違ふものの見えるは、畢竟古歌をよみ誤つたから起つたものぢやと先哲の説ぢや、

題しらず　よみ人しらず

うちわたすをちかた人に物まうすわれそのそこにしろく咲けるはなにの花ぞも

是は梅の花をよんだものぢや「打わたす」といふ詞には彼是論もあるが、つまり鈴の屋翁の見渡す事といはれたに外ならんが　唯見渡すは、廣く向の方を見渡す事、打渡すは向に一つの當が有つて、それに對うて見渡す事ぢや「をちかた」人のをちは今いふあちといふ事、必ず遠の字の意には限らぬ、あちらの人といふがをちかた人ぢや　物まうすは物をうけたまはりたいとの意、○「向にみえるあちらの人に、物をうけたまはりませう、わたしは　それそこの處に、白く咲いて居る花は、何といふ花でありますぞ、まア見事なこと」　梅といふ事をわざと空おほれしてかくとひかけたぢや、

かへし

春されば野べに先咲く見れどあかぬ花。まひなしにたゞなのるべき花の名なれや

「まひなしに」まひは幣でおくりものといふ事、おくりものなしではが、まひなしにぢや　「なのる」は名告るで名を告げ知らせること　名なれやは名ならんやで、名ではないといふ事、○春になれば野べに先一番に咲き出でゝ、見れどくわく事のない花（といふが此花である、しかし其名は）おくりものなしで只むさとしらせるやうな、安つぽい花の名ではありませぬ」といふで、かけ歌に應じ、本の句に梅といはず梅をあらはし、末の句にわざと名を告げず、よみなしたのが面白いのぢや、

題しらず

はつせ川ふる川のへにふたもとある杉。年をへて又もあひ見む二本ある杉

是は初瀬わたりに住居せる兄弟とか、姉妹とか、とに角二人の人に別るゝ時の歌と思はれる　二本ある杉は、古川邊にある二本杉に此別れる二人を比して

いうたものらしい　初瀬川は大和　古川は即ち初瀬川近傍の地名　そこに二本立て居る杉が古川の邊に二本ある杉ぢや　さて「年をへて又もあひみむ」といふ語調に、おのづから今別れんとする時のさまがひゝくのぢや　さて二人の人をさして二本ある杉というたのぢや　又ふる川とあるが、年をへてと自然にひゝき合ふが妙ぢや、○初瀬川の古川邊に立つて居る二本杉(その二本杉に今かく別るれども)年をへて後、又も相見る事でもあらう、其二本杉よ、

つらゆき

君がさすみかさの山のもみぢばのいろ神な月しぐれのあめのそめるなりけり

「君がさす」は、みかさの枕　さて笠といふから時雨のあめとうけたのぢや、○君がおさしになるみかさといふ山の紅葉ばの色(あゝうるはしいことぢやがそれは)十月になつて、笠にかゝる時雨の雨がそみついて、あのやうにうるはしうなつたのである、といふぢや　偖此「そめる」とあるはそむるの寫誤か　遠鏡にそめるはそみたるといふ意ぢやとあるが、さらば時雨のあめにとなくてはならぬ　時雨のあめのではどうしてもそむるとあるべきである、故に寫誤りであらうといふのぢや、

誹諧歌

誹は俳の草書から寫し誤つたもので俳諧ぢやといふは古人の説で定まつて居る　之を「はいかいか」とよむ　俳諧は諧謔の意で、口輕くざればみて聞えるものを俳諧歌といふ　なれども是は俳諧ぢや、是は俳諧ではないと、たしかに其毛色が分たれるものではない、つまり撰者の見はからひで集めたものぢやとは既に鈴の屋翁もいはれた事である、

題しらず　よみ人しらず

梅の花みにこそきつれうぐひすの人く〳〵といとひしもをる

「人く〳〵」は鶯の切聲になくが「ひとく〳〵」とやうに聞ゆるを人來〳〵といひなしたのぢや　「見にこそきつれ」といふ言外に鶯の害となるべきではないにといふやうな情がおのづからひゝくので、こゝが妙なぢや、○梅の花を見やうとてサわしは來たのみの事ぢや、(何の意もないのに)鶯が人來〳〵と厭うてサ、

ゞァ居る事よ、あのやうに」といふので「じもをる」の詞が最も妙なぢや、

山吹の花いろごろもぬしやたれとへど答へず口なしにして　素性法師

山梔子は、黄色の染料にするものぢやから黄色の事をやがてくちなしといふ事となつたぢや　故に此歌では其梔子を口の無いといふにかけていうたのぢや、○此山吹の花の色の衣服の主は、誰であるかと問ひかけても一向答へがない、梔子といふ通り口がないで、

いくばくの田をつくればか郭公しでの田長を朝な〳〵よぶ　藤原敏行朝臣

「しでのたをさ」「しでたをさ」ともに郭公の鳴く聲が、さやうに聞きなされるからいふもので、つひに異名ともなつたのぢや　催馬樂に「しでたをさ」とみえ、此歌又伊勢物語の歌などに「しでのたをさ」とあれば、古くよりいはれたものぢやと古人の説ぢや　偖此名について種々むづかしい説があるが、つまり鳴く聲がさやうに聞えるといふから出たものとすれば、彼此いふべき譯柄のあるべきではない　故に此歌も「しでのたをさ」とあるを、田長にかけたまで、「しでの」といふは無意義と見るべきぢや　郭公が毎朝田長々々と促しよぶといふから、何程多くの田を作るならんといひなしたのぢや　田長は田子をひきねて植付などの事を督促する者ぢやからである、○何程多くの田を作る故であらうか、郭公は、しでの田長といふ名を毎朝よび立てゝ促がしたてる事であらう、とぢや　或説に「しでのたをさ」は賤の田長といふ事で、郭公の聲でもなく、異名でもないといふは、他の古歌も知らず、又此歌をも淺くみての説で取りがたい是はついでにお話し申しておく、

七月六日たなばたのこゝろをよみける　藤原かねすけ

いつしかとまたぐ心をはぎにあげて天の河原をけふや渡らむ

はし詞は、七月六日の日に、二星の事をよみけるといふ事で、織女の六日の意志といふ事ではない　たなばたはひろく二星の事をいふのぢやが此歌では自然牽牛の事となるのぢや　またぐは、此時代の詞で、急いで待ちもだえる意

史記晋世家に速の字をマタゲル（八尾版）と訓じてあるので明かぢや　それを跨ぐの詞にかけたので、跨ぐは此より彼に足をかくる事、即ち六日より七日に心を驚すること　之を只待つといふを延べていふ詞と説くはくはしくない

「はぎにあげて」は土佐日記にも見えた詞是も當時の詞で形に顯はすことにいふもの　それを物を跨ぐには衣を裳げるものぢやから、脛に掲げてといひかけたぢや、○いつか〳〵と急いで待ち問え、またぐ心を脛に掲げ、即ち形に顯はして、天の河原を今日からはや渡る事でもあらうか、

題しらず　凡河内躬恒

むつごともまだつきなくにあけぬめりいづらは秋の長してふ夜は

「むつごと」は睦言で睦ましく語らふ詞といふこと「いづらは」のは歎辭マア

といふ程のこと、どこぢやマアがいづらはぢや、○睦ましく語りかはす詞もまだ盡きないのに、モウ夜が明ける樣子である、どこぢやマア秋の長いといふ夜の實は、

僧正遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時

年の若い女子が集ると必ず衣服の事又は化粧の事などたがひに口やかましく話し合ふものぢや　此歌は其さまを見て、よんだものと思はれる「あなかしかまし」の句が、どうもさやうに聞える「なまめき」は婀娜にたをやかな貌をいふ　女の集まりたるを女郎花によせていうたのぢや、○秋の野にあだめきたをやかにたちならんで居る女郎花よ　あゝ口やかましい事ぢや、其花のさかりも只一時の程ばかりぢや、（忽ち衰へてしまう物ぢやに）

よみ人しらず

秋くれば野べにたはるゝ女郎花いづれの人かつまでみるべき

是も女子を女郎花に寄せていうたもので「たはるゝ」といふ詞について見れば、女房などが我に戯れて、からかひなどした時、即興によんだものでもあらうか「つまでみる」は花を摘まずして唯見過すといふに摘まゝず即ち手をつけずよそに見過すといふをかけたのぢや　之を古く爪ることを抓むといふか

ら抓むといふ事とするはよくない、○秋がくれば野べに立つて、たはれ亂れかゝる女郎花の花をば何人か摘まず即ちつまないでよそに見過す者があらうぞや、

秋霧のはれてくもれば女郎花花のすがたぞ見えかくれする

是も同じく女郎花に寄せたもので、几帳又は小簾などから見えたり隱れたりするさまを秋霧によせたものぢや○秋霧が晴れたり、くもりたりすれば、女郎花のうつくしい花の姿がサ見えたり隱れたりする、(アヽどうぞはつきりとみたい、)

花と見てをらむとすれば女郎花うたゝある花の名にこそありけれ

是は全く女郎花をよんだもので、正義に法師の歌ぢやらうとあるがよろしい「うたゝある」は「うたてある」と同じで、けしからぬといふ事前に委しく御話し申した、○尋常一樣の花ぢやと見て、立よつて折らうとすれば、女郎花といふけしからん名の花でサ有つたわい、(女郎と聞いては、花でも折られやうかい)

寛平、御時きさいの宮の歌合の歌

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり〳〵すなく　在原、むねやな

「つゞりさせてふ」は「つゞりさせと言ふ」で、蟋の聲はつゞりさせ〳〵となくやうに聞ゆる由、古くからいはれて居るからぢや　偖つゞりさせは、衣の破れ、又は綻びたるを針にて縫ひ補へといふこと　花の名が藤袴といふから綻びとかゝつてつゞりさせとうけたのぢや、○秋風が吹くに依つて綻びたことらしい藤袴の花が、つゞりさせといふきり〳〵すがあれあのやうにないてをる、

あす春たゝむとしける日となりの家の方より風の雪を吹こしけるを見てそのとなりへよみて遣はしける　きよはらのふかやふ

冬ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花はちりける

○まだ冬ではありながら、春ももはや明日となつて近隣の事であれば冬と春との境の中垣からしてサ花がちつて來る事でありますわい、

題しらず　よみ人しらず

いそのかみふりにし戀の神さびてたゝるに我はいぞねかねつる

何物も年久しくなれば靈が入つて祟をなすものと此時代には言はれて居た事で、又安眠の出來ぬなども多く物怪などの祟による事に言はれたぢやから此歌では、年經た戀が靈が入て其祟で安眠が出來ぬといひなしたのである「いそのかみ」はふりにしの枕ぢやが、石上には布留神社といふがあるから、其縁で神さびてと受けたぢや「神さびて」は、此歌ではふるけ物さびたる事にいふのぢや、○昔から多くの年を經歷した戀が、ふるけ物さび、靈が入つて祟をするに依て、わしは何分安眠がサ出來かねる、

枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞとこ中にをる

枕は、頭で前、あとは脚で後ぢや　枕よりあとよりは、前からも後からもぢや戀を姑く活動物として、それが前後から責寄せて來るといふ、情の緊切なをいふぢや「せんかたなみ」は爲ん方無くてといふ事　之に浪をいひかけたといふは從はれぬ、只せん方なくてと見るべきぢや　前後から戀が責來るに依り、せん方なくて床の眞中に坐して居るといふので寐られぬといふ事ぢや、○前からも後からも戀が責め寄せて來るから、すべきやうもなくて、只床の中にかゞまり居る事ぢや、

戀しきがかたもかたこそありときけたてれをれどもなき心地する

此歌も古來の諸說すべて要領を得ぬ「かたもかた」のかたは形體といふ事で「戀しきがかた」は、戀しきといふものゝ形體、即ち戀の形體といふ事ぢや　戀の形體といふものは、もとよりあるべからざるものなれども、しかし其本は、我が思ふ人より生ずるものぢやから、其人の形體はあるといふので　上のかたは戀の形體といひ、下のかたは戀人の形體をいふ　戀の形體の漠然たるものもなきものにあらず、あるものと聞くといふが、上の句ぢや　偖あるものならばとて立ちて見居て見ても見えぬといふが、下の句ぢや「たてれをれども」は立ちてあれども、居てあれどもといふ事　「なきこゝちする」は、なき心地する事か

なとの含蓄で、あゝと聞けども目に見えぬをいふのぢや、○戀しいといふものの形もないではない、固より形體がサあると聞くことぢや　さらばあると立ちて見れども、居てみれども、どうもないやうぢや、

ありぬやとこゝろみがてらあひ見ねばたはふれにくきまでぞ戀しき

「ありぬやと」は、逢見ずして居らるゝやとの意「こゝろみがてら」はためしながらで一方には人目を憚り一方には試しながらぢや「たはぶれにくき」は、戯れよりおこる後悔をいふ詞で、悔しき意と見て大方通ずる詞ぢや、○逢はでもさて居らるゝやと試しながら逢ひ見なくて居れば、それが却て悔しい程にサ戀しい事ぢや、

耳なしの山のくちなしえてしがな思ひの色の下ぞめにせむ

耳梨山は大和ぢやが、此歌では只人に聞かれず人に言はれざらんとの意より耳なし山の山梔子といふのぢや　偖山梔子は染料とするものぢやから下染といふので下染は下地といふ事　耳なし口なしを下地としたなら思緋の色が人の耳に聞かれず人の口にのるまいといふので、思ひのひに緋をかけたのぢや、○耳なしの山に生へる口なしをどうぞ手に入れたいものぢや　わしが此戀の思緋の下地に染めやうから、(さうしたならば、思ひの色が人の耳に入り、口にのる事があるまいから)

足ひきの山田のそほづおのれさへ我をほしといふうれはしきこと

是はいかゞしい者に懸想せられたを厭うてよんだ歌ぢやが歌がらに依てみるに他に懸想せられた人が有てそれをいなんだ折から、更にいかゞしい者が言ひよつたといふやうな事らしい　山田のそほづは、山田の案山子といふ事いかゞしく人數にも入らぬ者をいふ　おのれは汝といふこと、彼をいやしめていふ稱　「我をほしといふ」は、我を得たいといふとのこと　「うれはしき事」は、厭はしくいやな事といふ意、○あれあの田に立つて居る、案山子のやうな人數にも入らぬ汝までさへ、わしをほしいといふ、厭はしくいやな事よ、

きのめのと

ふじのねのならぬ思ひにもえばもえ神だにけたぬむなし烟を

「ふじのねのならぬ思ひ」は、不二の山のもえるは炎とならぬ故、思ひに火をかけてならぬ思ひというて、遂げぬ思ひといふにかけたぢや　「もえばもえ」は、もえばもえよで、もえるならばもえるがよい、外にせんかたもないといふぢや　「神だにけたぬ」は、神でさへ消すことの出來ぬといふこと　「むなし烟」は、火のみえぬ煙といふで、即ちならぬ思によせていふ、○「不二の嶺のもえるやうに、炎とならぬ火即ち遂げぬ戀の思ひにもえるならば、もえるがよい、(外にせん方もない)神でさへ消す事の出來ぬ、空しくむだな煙ぢやものを」といふので　是は此よみ人が平伸との贈答が、後撰集に入てをるが、其時の又一首ぢやらうといふ古人の説がある　何さまさうらしいが、さうすると歌の意もおのづからかはるが、今は此題しらずとある上からお話を申すのぢや、

逢見まくほしは數なくありながら人につきなみまどひこそすれ

きのありとも

「逢ひ見まくほし」は、逢ひ見たいといふ事、それを畢にいひかけたので、數なくは數限なくぢや　「人につきなみ」は、人につきがなくて、即ち人に逢見る手續き付端がないといふ事、それを「月無み」とかけたぢや、○逢ひ見たいといふ見まくほしは數限りもなくあるなれども、其人に逢見る付端のつきがなくてとんとまどうてサ居る、

人にあはむつきのなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり

小野小町

是は題本に「月のなきよは」とあるがよいと古人もいはれた　是も付端の無いといふを、月の無いにかけたぢや　思ひおきては戀ひ思ひ起きてと、月を思うておきゐるにかけ　さて思ひおきに火の熾をかけてはしり火といふ　はしり火は火のとびはしるにいふ名詞　胸騒ぎするを此時代の詞で胸はしるというたから、それにいひかけたのぢや、「心やけをり」は、心がやけて居るで、心が焦れるのぢや　胸さわぎがして戀に心を焦すといふを、走り火に寄せていうた

ぢや、○戀人に逢ふべき便宜のない晩いや月のない晩は、それを思うてねもやらず起きて火の熾ならず、胸のはしり火の胸さわぎして心を焦して居る、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかぜ

春霞たなびく野べの若菜にもなり見てしがな人もつむやと

初二の句は、若菜の生ずる野の景色をのべたのぢや　若菜は只若菜というた丈で老人の若くなりたいといふではない　「人もつむや」は、人が言ひよること を摘みとるによせたので、前のつまでみるべきと同じぢや　是も抓むといふではない、○春霞がうら〳〵とのどかにたなびく野べの若菜にヤァわしはなつて見たいものであるなァ　さうしたならば、人が摘みとる事もあらうとおもふから、

題しらず

よみ人しらず

思へども猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじとおもへば

霞に寄せて人の情を廣く賞る事をいうたもので「うとまれぬ」も自然霞の縁語「かゝらぬ山のあらじ」は何方にも關係することぢや、○親しくなつかしくは思ふけれども、やはり又うとまれる事ぢや　あの春霞はこゝかしこどこの山にもかゝりあはぬ山はあるまいと思ふ事ぢやから、

春の野のしげき草葉のつまこひにとびたつ雉のほろゝとぞなく

平貞文

「しげき草葉のつま」はしげき若草ぢや　つまは草の端で若草をいふ若草を先出端といふので明かぢや　さて其端をやがて妻戀といひかけ、しげき妻戀といひなして若草に緣のある雉を枕としてとびたつ雉のとして「ほろゝとなく」とうけたので、意はしげき妻戀にほろゝとなくといふのぢや、○春の野に生ひ出る若草の至つてしげい妻戀からして、其若草の間にとび立つ雉子の如くほろゝと涙を落して泣くことぢや、

秋の野に妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく

きのよしひと

是は鹿によせていうた歌で、上の句は、心をかけて年頃になれども、成らぬといふ事で　妻なきは妻を得ぬこと即ち年をへて妻を得ぬ秋の野の鹿で、それは即ち我が事をいふのぢや　さて何ぞ我が戀の甲斐なるとて泣くといふを、鹿の聲のかひよにかけていうたのぢや　此歌の事は遠鏡及び玉の緒の二の末に疑はれた説もあるから、稍くはしくお話を申すのぢや、○秋の野で妻をわがものとせぬ鹿が、それで年來となる事であるから、何がわしがかほどに戀ひ思ふ詮よ即ちかひよというておくのみぢや、

蟬の羽のひとへにうすき夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ　みつね

「蟬の羽の」は夏衣にいふ詞で、蟬の羽の如きといふこと「ひとへにうすき」は、夏衣によせて戀人の心の一向にうすく冷淡なること「なればよりなむ」は地合の薄き衣は着馴せば織糸が紕るものぢや、それを襲れ馴染めば近より親しむといふにかけたのぢや、○蟬の羽のやうなひとへにうすき夏のきものは、馴れなじめば、地合が一所に紕るものでないか　さらば一向に薄い冷淡なあの人の心も馴れなじんだ事ならば、段々近くよるやうに必ずなるであらう、

かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬ名はたゞしくるなといとひそ　たゞみね

「かくれぬ」は隱沼で、草などが生ひかぶさりて隱れた沼をいふ　「したよりおふる」は下に生ずるといふこと　にをよりといふは、前よりゆく川」の類例が多い「ねぬなは」は蓴菜ぢや　上の句はねぬ名はといはん序で、それに隱れ沼の下よりなど忍ぶやうの意を含め　又「ねぬなは」の名に繩をかけて繰るといひかけたのぢや、○隱れ沼の下に生ずる蓴菜即ねぬなはの、其名ではないが　寐ぬ名は即ち君と共に寐ないからは、名は立つ事があるまい、只來る(繰る)丈をば厭ひなさるな、

ことならば思はずとやはいひはてぬなぞ世の中の玉だすきなる　よみ人しらず

「ことならば」はいつその事にといふことなるは、すでにお話し申した　世の中はこの歌でも男女の間のこと「玉だすき」は、こゝとかしこにかけるもの、兩端を持して、どちらとも決せぬ事を此時代「玉だすき」といったものとみゐる「玉心すきなる」と打任せていったさまがさう思はれる、○いつその事に思はないとはつきりと言ひきるがよいではないか、なんでわしが中が玉だすきでどちらつかずであらう、

思ふてふ人の心のくまごとにたちかくれつゝ見るよしもがな

くまはすべて屈曲するところ、轉じて陰の事にもいふ、此歌でも心の陰といふ、程の意ぢや、○わしを思ふといふ人の、其心の陰々にひそかに立より身を隱して、實にわしを思ふ事か又は口先でさやういふ事か、正しいところを見たいものぢや、

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

○わしはあの人を思ふ事であれども、人はわしが人の事を思はない〳〵とばかりいふ事ぢやから、いや〳〵是からは思ふまい思うてもかひがないから、

我をのみ思ふといはゞあるべきをいでや心は大ぬさにして

「大ぬさ」は、情の多いこと「大ぬさの引く手あまた」といふから出た詞で、是も此時代打まかせていった詞らしい、それを心の多いに云ひかけたのぢや、○わたし一人ばかりを思ふといふ事ならば信じてあるべき事なるべきを　いやさ心が多くて大ぬさで、引く手あまたであるからして、（どうも信せられぬ）

我を思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人の我を思はぬ

○わしを懇に思うてくれる人をわしの方では思はぬ應報であらうかしてわしが懇に思ふ人が、一向わしを思うてくれぬ、（さもなくては是程に思ふに、さきが思はぬ筈がない）

一本

思ひけむ人をぞ共に思はましさしやむくいなかりけりやは

是は一本には深養父とあれど、猶普通本の通りよみ人しらずで、前の歌と同じ人の前の歌について、更に開悟した歌らしい、○わしを懇に思うてくれたらしかった人をばサ　わしからもともに懇に思ふべきであつた、（あゝ罪な事をし

た、覿面正しい事ぢやつた、應報がなかつた事か、(此通りであるものを)　一本

いでゝゆかん人をとゞめむよしなきに隣のかたにはなもひぬかな　よみ人しらず

傍で噂る、即ちくさめをする者があれば、家を出づるを躊躇するといふ習俗が此時代有た事とみえる、○出でゝ歸り行かうとする人を、おしとゞめやう爲便がない事ぢやに　近邊でくさめをする人でもあればよいと思ふを、それもする人がない事かいなア、

紅にそめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなり

一たび深く契りたる人の心も飽く時は忽ち變ずるといふを色によせていうたものぢや　「紅にそめし心」は深くそれに浸み入りし心といふを紅について　いふ　さて紅の色は灰汁で洗へば變じさめるものぢやから飽くにうつるとかけたのぢや、○紅の色のやうに深く染めたる心というても、信じて安心は出で來ぬ人を飽くといふ灰汁には忽ち移り變るといふからぢや、

厩はるゝ我身は春の駒なれや野がひがてらにはなちすてつる

「野がひがてら」野がひは厩にひかず、野にて飼ふをいふ　がてらはながらで「野がひがてら」は、野がひのまゝといふ事○いやがられるわしが身は春の野の駒であるる事ぢやからして、厩にも引かれず、野飼のまゝで打やりばなしにしてしまうた事である、

鶯のこぞのやどりのふるすとや我には人のつれなかるらむ

初二の句は、ふるすといふにかゝる序で、それに去年來たり宿りしまゝ來らぬとやうの意がおのづからひゞくのぢや　「ふるす」とは、すさめず打捨つる事古くするでこゝでは思ひ捨てる事、それを鶯の古巣といふにいひかけたのぢや、○鶯が去年來て宿つたる古巣、其ふるすといふやうに、わしを思ひ捨てる故でもあるかして、わしにはあの人が同情なくて一向に來る事がないであらうか、

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

さかしらは恣なる事にも、せずとよい事をする意にも、又さし出でとの意にも、

痩我慢といふやうな意にもいふ詞、委しくは雜考にいうてある　こゝは痩我慢といふ如き意のものぢや　「夏は人まね」は、夏は暑いとて誰も獨寐する故、其まねをするといふ事　「さゝの葉のさやぐ霜夜」は寒夜といふ事　「霜夜を」のを は「なるを」の意で重い辭ぢや○痩我慢に、夏は暑いというて人まねに獨寐してもこらへた事ぢやが　笹の葉がさや〳〵と音がして霜の置き渡す此頃の寒夜なるをわしは只一人で寐る事ぢや、さて〳〵つらい事ぢや、

平中興

逢ふ事の今はつかになりぬれば夜深からではつきなかりけり

是は逢見る事の稀なる上に、深夜ならでは逢はれぬやうの都合が有てよんだものとみえる　「はつか」は稀といふに廿日といふをかけたので　「つきなかりけり」は、便宜のないといふを、月のないにかけたぢや　廿日の月は夜更けて出るものぢやからである、○逢ひ見るといふ事が今はもう稀にはつかとなつた事ぢやから夜が深くならないでは其手つゞきのつきはがない事であるわい、

もろこしの吉野の山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに

左のおほいまうちぎみ

「もろこしの吉野の山」とは、吉野山は深山で、世捨人が常に隱れる山ぢやが、それを一層甚しく言ふがために唐土のといふので、唐土に吉野山があるといふではない　唐土にもし吉野山が有てそこに入るとてもの意ぢやと古人の說ぢや、○(我が國ならぬ)唐土の吉野の山にもし君が引こもる事があるとしてもおくれて殘りとゞまらうと思ふわしではない、(どこがどこまでも君と一所に居らうと思ふ)

雲はれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

なかき

是は人が何か我を疑ふ事が有つて中絶えんとした時によんで送つたものらしい　初二の何はあさましの序で、それに雲はれぬの詞に確かな樣子も見ないでといふ意をひゞかせたのぢや　「あさましや」は、意外の事に思うて呆れ怪

しむこと「人の心を」は、こゝは自身の心といふ事　人が何か我を疑ふ事が有つて絶えんとする樣子を見て意外の事とあさみ怪み我が心の果して變れるか、いかにといふを明かに見て、さてやむならばやめかしといふのぢや○あの雲が晴れないで、更に樣子の明かでない淺間の山の、あゝあさましい意外に果れた事よ（樣子も明かにせんで絶えやうとは）わしが心の果していかなりといふ事を、たしかに見定めてこそ止めるなら止めるがよい、

伊勢

難波なるながらの橋もつくるなり今は我身を何にたとへむ

此「つくるなり」といふに「盡くる」「作る」兩説あるが作るの説に從ふべきぢやとの由は序でお話し申しおいた　長柄の橋は古いものゝ例にいはれてをることは雜上に「世の中にふりぬるものは津の國のながらの橋と我となりけり」とあるでも明かぢや　さて此歌は歌の表では身のふるけたを歎じたものに見えるが、戀の歌の中に入れられてをるから、今は戀歌の上でお話しを申す、○難波の地にある長柄の橋は、是まで古うなつたものに譬へ來た事ぢやが、それも此度新に造る事となつた事ぢや　さらば今からは人に捨てられて古物とせられたわしが身をば何にたとへを取りませう、（何も取るものがない）

よみ人しらず

まめなれど何ぞはよけく苅萱の亂れてあれどあしけくもなし

「まめ」は實着でまじめといふこと　「よけく」は「よく」といふ事　「何ぞはよけく」は「何ぞはよくあるを」のあるを含めた詞　何ぞはよき」といふではない　苅萱は亂れ易い草故亂れての枕においたのみぢや　「あしけくもなし」はあしくもなしといふ事○まじ目にして居たとて、何がよくあるか、（別に是がよいといふ事もない）　苅萱のやうにあちらこちらと騷ぎ亂れて居るけれど、それも別にわるくもない、（して見れば、まじめにして居るは損ぢや）

おきかぜ

何かその名のたつ事のをしからむしりてまどふは我ひとりかは

○何のそのうき名が立つぐらゐの事がをしからうや惜しくはない　戀をす

れば名が立つといふをしりながら迷ひこひは、わし一人ではない、(誰も皆さうぢやものを)

いとこなりけるをとこによそへて人のいひければ　　く　そ

従弟なる男と、くそが通じたと人が評判したといふのぢや「よそへて」はそれと通じたといふ意ぢや、

よそへながら我身にいとのよるといへば唯いつはりにすぐばかりなり

従弟を糸によせていふたぢや　偖従弟を「いとこ」といふが、この子は背子我妹子の子と同じくそへて云ふまでで、古くは「いと」といふたものぢやちうと正義にあるはさることゝ思はれる「いとのよる」は、従弟に通ずるといふを、糸の縒るとかけたもの「いつはりにすぐ」は偽りと聞き過すといふをいつはりといふ針に着ぐとかけたのぢや○よそへながら、即ち風聞に聞けばわしが身にいとがよるといふ事ぢやから　さらば其縒る糸は、いつはりといふ針にすぐ通すばかりの事ぢや、いつはりと聞過ぐばかりぢや、

題しらず　　さ　ぬ　き

ねぎごとをさのみ聞きけんやしろこそはては歎きの森となるらめ

是は男の懇想文に對して、それをいなむ歌ぢやちうと古人の説ぢや「ねぎごと」は「願ひ言」「さのみきく」は言ふまゝに聞き屆けること「なげきの森」は大隅にもあるがこゝは名所ではない唯歎きといふを木にかけて其茂きを森といひなしたのぢや　一首の意は、人の言ひ來る詞を、言ふがまゝに容易に聞かば、竟には茂き歎きの種とならうといふを、願言、社、森などの詞で仕立てたのぢや、○心願事を言ふがまゝに聞屆ける神社こそは、其終の果には歎木が生ひ茂つて森となる事であらう、

歎きこる山とし高くなりぬればつらづゑのみぞ先つかれける　　大輔

歎息のきを木によせ、さて凝るを樵るにかけて「なげきこる」といふ　「山とし高

くは歎息のつもる事で、是も木を樵る縁語「つらづゑ」は頬杖のこと　頬杖を
つくは歎息する時の狀形、それを樵夫が木を荷ふに杖をつくにかけたのぢや、
○歎木をこる事が山とサ高くつもつてくれば頬杖ばかりがサ先第一番につ
かれる事であるわい、

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらな
り　　よみ人知らず

初二句は「なげきのみをばこりつみて」といふこと「かひなく」は即ちなげきを
こりつみたる甲斐なくの意ぢや、○歎息のなげきばかりをこりつむまでで、な
げきこる山の峽、イヤ歎いた詮もなくなりさうに思はれる、

人こふることを重荷とになひもてあふごなきこそわびしかり
けれ

「重荷とになひもて」は、重荷を背負ひこんだことで、苦しいこと即ち懇に苦しむ
のぢや　枴は天秤棒のことで、逢ふ期にかけたぢや、○人を戀ふといふことを
重荷に背負いこんで苦しくてたまらんのに、天秤棒の逢ふ期がないといふが
サ迷惑難義な事であるわい

霄のまに出て入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな
上の句は、われてといはん序で、それに傳にしばし影をみせたのみといふやう
な意を含めたのぢや　「われて」は此時代一途にといふ如き意に用ひられた副
詞ぢや、○霄の程にちよつとしばし出たかと、みるまもなく入つてしまうた三
日月の影の　われて一途に物を思ひ亂れる時分でもある事かいなア、

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさ
きるさに

「そへに」は「其方に」で、即ち「それにといふこと　「とすればかゝり」は、右にすれば左
となる事　「かくすれば」は、下に「とあり」といふを含めた詞で、左にすれば又右と
なるをいふ　「あないひしらず」はあゝどうもせんかたがないといふ事　「あふ
さきるさ」は、合ふ際離る際で、さは、往くさ歸るさのさ、其涯際にいふ辭　「あふさ
きるさに」は、あれやこれやの度々にといふ事、○それにせんと思うて右にすれ

ば、左となり、(さらばとて左にすれば、又右となる)あゝどうもせんかたがない、あれやこれやのたび毎に、

世の中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ

是は憂き事の數多きを、かやうにいひなしたので、實は一たび身を投げた上はふたゝび投げる身はない事ぢやが、それをかやうにいふが歌ぢや○世の中が憂くて生きて居られず思ふ度毎に、思ひ通りに身を投げる事ならば、深い谷もおひ〳〵と埋まつて、終に淺くなる事であらう、

在原もとかた

世の中はいかに苦しと思ふらむこゝらの人に恨みらるれば

世の中といふものを心あるものとしていうたものぢや「こゝらの人」は多くの人といふこと、○世の中の心はいかばかりか苦しく難義に思ふ事であらう、世間の多くの人達に世は憂いものぢや、ういものぢやとて恨みを言はれる事ぢやからして、

よみ人しらず

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき

「いたづら」は無益無用の意　身に成しとげたる事なく無益に老いたるが、いたづらに老いたのぢや　「年の思はん」は、是も年を心あるものとしていふのぢや「やさし」ははづかしく思ふこと　是より轉じて優柔なる態にもいふことゝなつたもので、婦女子などが物はぢをするさまにいはれたに本づくものぢや、○何事をしてわしが身は、かやうに無益無用に年老いてしまうた事ぢやらうわしが取りたる年の思ふであらう事がサ、いかにも恥かしい事である、

おきかぜ

身は捨てつ心をだにもはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく

「身はすてつ」は、身は世を思ひ捨てつぢや、即ち名利の念を絶ちて世を思ひ離れること　「はふる」は、放ち捨てること　「心をだにもはふらさじ」は、心だけでも放ち棄てずして持ち居らうといふぢや　心をだにはふらさじとは身を捨つといふに對して詞の上からいふので、實は世を思ひ捨てるは心を放棄せざらん

爲ぢやが、姑くかやうにいひなしたのぢや　さて心を放棄せずして思ひ捨てた身が、つひにどのやうになるものかと觀察せやうといふのぢや、○身は世上を思ひ捨てゝしまうた、しかし心だけをば放ち棄てる事なく持つて居らう捨てた身が行末どのやうになるものか其有樣を承知せんが爲に、といふので、幽玄の意味を却て淺ちかにいうたのが面白いのである、

ちさと

しら雪のともに我身はふりぬれど心は消えぬ物にぞありける

「白雪のともに」は「白雪と共に」といふこと、此時代一種の語法ぢや「ふりぬれど」は舊りを降りにかけたので「心は消えぬ」は心は衰へぬといふを雪の緣語でいふのぢや、○白雪と共にわしが身はふりはてた事ぢやけれども、しかし心は消えない、衰へない、まへかた通りのものでサあるわい、

題しらず　よみ人しらず

梅の花咲きての後のみなればやすき物とのみ人のいふらむ

是は題しらずぢやからもとよりわからんが　上の句のさま、人の家に却どりせられたとか、何とかいふ事實が有て、それをいふものゝやうに考へられる梅の實といふに身をかけた許りではなく、咲きての後といふも他と緣を結んだ事をいふものゝやうにみえる「すきもの」は當時好色の人の事にいふ名それを酸きものとかけたのぢや、○梅の花が咲きてのあとのみである故でかすきもの（好色人）ぢやとばかり彼是の人々が言ふ事であらうかしらん、

法皇にしかはにおはしましたりける日、さる山のかひにさけぶといふことを題にてよませ給うける　みつね

佗しらにましらななきそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

「わびしらに」はわびしさうにで、一口にいへば迷惑さうにぢや　猿の聲は腸を斷つなどもいうて物かなしく聞えるからいふ「ましら」は猿の事、わびしらにましらとつゞけて調をとゝのへたのぢや「山のかひある」は、山の峽といふを法皇の御幸を待ち得て、山の光榮あるにかけたのぢや「今日にやはあらぬ」は

反語、今日ではないか、今日であるといふ事、○迷惑さうに猿よさやうに鳴くことなかれ、此有がたい御幸を得て此山の峽即ち光榮ある今日ではないか、今日であるのに、

題しらず

世をいとひこの本ごとに立よりてうつぶしぞめの麻のきぬなり　よみ人しらず

上の句は、うつふしといはん序で即ち麻の法衣に縁あるものを序としたのぢや　雲水の身の處を定めず、毎夜木の本に立よりてそこにうつぶし眠るといふにうつぶし染をいひかけたのでうつぶしは内伏で、かゞまり伏すこと、内臥といふ意ではない　樹下に眠る事故もとより足を伸して安く臥すではないい、俯し屈んで僅かに眠るのぢや、それがうつぶしぢや　此時代は勿論、平安朝の末まで「うつぶし」といふは、うつぶき伏す事にいうて、臥す事ではない　うつぶきて臥すをば「うつぶしふし」というた事物語文に多くみえて居る、偖又うつぶし染とは、黒い色をいふ　五倍子は扁圓なもので、内が虚空なものぢやから空欵子の名があるのぢや　此うつぶしといふも古來の説が、要領を得ぬから稍、委しくお話し申すのぢや、○世の中を厭ひ捨てた雲水の身は、常に木の下ばかりを宿として立寄りて、うつぶし眠る、其うつぶし染の麻の衣である、是此衣は、

古今和歌集卷第十九終

大歌所御歌

大歌所は神樂、風俗などいふたひものを掌る場所で、其筋の官人、歌人などが出仕して取調をし、又傳習をもする所ぢや　偖當時は朝廷で祭事又は儀式などの時に用ひられる歌を、大歌といひ、民間に行はれるを小歌といふたぢや故に大歌所御歌とは、朝廷で用ひられる御歌といふ事ぢや、

おほなほびのうた

おほなほびは、おほなほみと唱へ直相の轉訛で宴會の事をいふといふ説がよろしい　是はもと新嘗會の竟に豐樂殿で五節の舞が有て、百官に宴を賜はるより起つた名で後には御祭事が竟つて、後の宴會の事をすべていふことゝなつたものぢや　大直日の神といふ説の論に足らぬは言ふまでもない事ぢや、

新しき年のはじめにかくしこそ千年をかねてたのしきをへめ
日本紀にはつかへまつらめ萬代までに

是は歌がらに依て考へて見るに、元日の節會などにうたはれた物らしい「かくしこそ」のしは強めの助辭でかくの如くこそ、即ちかやうにこそぢや「千年をかねて」は千年をかけてで、千年の末までも際限なくといふ意「たのしきをへめ」は「樂しき終へめ」で樂しみ盡さうといふ事　今の世では樂しみ終へめと、いひたいやうぢやが、古くはかやうにいうたこと、萬葉に例がある　今の本に「たのしきをつめ」とあるは、へをつに寫し誤つたのである、○新しく改まつた年の始に於て、此の如くにサ千年の末までかけて、際限もなく樂しみ盡すべき事であるといふぢや　偖此注は例の通り取られない、但しこゝに日本紀とあるは續日本紀の事ぢや、

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆる哉

やまとまひは舞樂の名ぢや　さて此歌はもと戀歌なるを、君上を思ひまつる事に用ひたのぢや「しもとゆふは、かづらの枕詞で「上の句は、まなく時なくといはん序ぢや　葛城山は大和ノ國葛城郡高山で雪が常に降る山ぢやから、間なく時なくにかけたぢや「まなく時なく」は、間斷なく常にといふ事、○あの高山の葛城山には平常雪が降て居るが、其降る雪のやうに、間斷なく常に君上の事を思ひまつりて、ちよつとも忘れる時はない、

あふみぶり

あふみより朝たちくればうねの野にたづぞなくなる明けぬ此夜は

あふみぶりのふりは風の字にあたる詞で曲といふにあたるものぢや　朝は古くは曉にもかけていふ　此「朝たちくれば」は曉に立ちたるをいふ　畝の野は近江ノ國淵生郡で、即ち淵生野ぢや○近江路から朝早く曉に立つて來れば畝の野の邊で鶴がサ鳴く事ぢやわい、モウ明けたとみえる、此夜るは、といふので明けぬのぬは過去を推察からいふ一つの用法ぢや、

みづくきぶり

水ぐきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

「水莖の」は、岡の枕詞「やかた」は屋形で永住といふでなく、一時假にしつらひた

る粗造の家形をなしたるもの　旅やかた船やかた、などいふに依てもしられる猶委しくは別にいふてある　岡の邊に作られた一時の住所といふが岡のやかたぢや　「霜のふりはも」のもは歎辭、ヤアといふ程の辭で霜の降りやうはヤアと其甚しいを歎じたぢや　「妹とあれと」とかゝつて、「霜のふりはも」とうけた言外に霜の甚しいを見て二人ねし夜の寒かりしを始めて知つたさまが、みえる、こゝが面白いのぢや、○此に高い岡にしつらひ設けた假屋の中に妹と我と暖かにねた夜の、翌朝の霜の降りかたはヤア、(何と甚しいではないか、してみれば昨夜はよほど寒かつたとみえた)

しはつ山ふり

しはつ山打出でゝみればかさゆひの島こぎかくるたなゝしを

舟

是は萬葉三に見えてをる高市連黒人の歌で、萬葉には「しはつ山打越え見れば笠縫の」とあるものぢや　しはつ山笠ゆひの島ともに攝津の國ぢや　「柳なし小舟」は小舟をいふ事、すでにお話し申しおいた、○しはつ山の見はらしのよい

場所にづッと出でゝ見渡せば　笠ゆひの島かげに漕ぎ隱れる、あまの小舟の景色が、あゝどうもおもしろい、

神あそびのうた

とりものゝうた

「神あそび」とは神樂をいふ　音樂の事をあそびといふは豫てお話し申した神あそびは即ち神祭の音樂といふ事ぢや　「とりもの」とは此神樂の時手に取りて舞ひかなでる物の歌ぢや　採物は九種ある榊、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、杓、葛ぢや、

神垣のみむろの山のさかき葉は神のみまへにしげりあひにけり

「神垣の」は、みむろの枕詞　「みむろの山」はこれは地名ではない、鎮坐の山をいふので社地の事、○神のしづまりますみ社の境内の榊葉は、社の大前一ぱいに繁茂した事ぢやわい、(サテモ〳〵神々しい)

霜八たびおけどかれせぬ榊葉の立榮ゆべき神のきねかも

榊によせて祠官を祝した歌ぢや　「やたび」は彌度で幾たびもといふこと　「神

のきね」は木根に宜禰をかけたので宜禰は神に奉仕する者、後に禰宜といふ者ぢや　上の句は立榮ゆといふ序で、さて立榮ゆべき宜禰というて木根にかけて祝したのぢや、○霜が幾度となくおいても、枯れるといふ事のない榊葉の立榮えてます〳〵盛となるべき神の木根、イヤ神の宜禰であるかいヤア、

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ

「まきもく」は、巻向と同じで、巻向の穴師の山は大和ノ國磯城郡ぢや　山かづらは、眞折の葛で頭を結ふをいふ　古昔巻向の神の祭事には殊にまさきの鬘をむねとしたるか、又は穴師山にてまさきのかづらを殊に行ひたりしかの事があつて、それによつてよんだものらしいが、今は詳かならぬ　何にしろ此山かづらといふ詞に依てとりものゝ歌となつたものぢや、○巻向の穴師の山なる山人ぢやと誰かれの人も見るでもあらうやうに、まさきの葛の山かづらをせられよ、

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかづら色づきにけり

○奥山にはもはや霰が降るらしい、あの外山に立つて居る、正木の葛が大分色がかはつてきたわい、

陸奥のあだちのまゆみわがひかば末さへよりこしのびくに

「みちのくのあだち」は今は岩代ノ國ぢや　昔此地から弓を出したものとみえる此歌はもと戀歌ぢやがそれをとりものゝ弓に用ひたのぢや　弓はひけば本末ともにより來るものぢやからいふので本は勿論末までもといふが末さへぢや　「しのびく」には「徐々と」の意で、弓のひかれて撓みよるにかけそれを人目にたゝぬやうにとの意にいふ、○陸奥の國の安達から出す安達の眞弓よわしが引く事ならば、本はもとよりで末までもわしの方によつて來れかし、そろ〳〵と目にたゝないで、

わが門の板井の清水里とほみ人しくまねばみくさおひにけり

「板井」は板を立てゝ側とした井戸ぢや　「みくさ」は水草ぢや　「人しくまねば」の詞から杓の歌としたので、古は井戸の水をば杓で酌んだものぢや　杓は水を掛む器と和名抄にある、○わしが門前の板井の清水は、人里離れてあるところ

ぢやから、誰も外の人がサ酌まぬ故に、水草が生じたわい、

ひるめのうた

此「ひるめ」といふことについて彼是説もあるが、げにと思はれるものもないいづれ何かの詞の轉訛したものらしいが、わからぬ事はわからぬとしておく外はない、

さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

是は萬葉に「さひのくまひの隈川に馬とめて馬に水かへわれよそに見む」とあるが轉じたもので「さゝのくま」は「さひのくま」の轉訛したもの　さは發語で「ひのくま」といふを重ねて音調をとゝのへたのぢや　もと戀歌で情人が檜の隈川の岸に馬を駐めて、馬に水飼ふ暫時の程もよそながら見んと歌うたもので「影をだに見む」は、直ちに語らはずとも、其姿をなりとも見んとの事ぢや、○あれあの檜の隈川の岸に駒をとゞめて、駒に水をなり飼はれよかし、さらば其しばしの程姿ばかりなりと見て心を慰めんに、かへしものゝうた

「かへしもの」は律といふこと　「かへしものゝ歌」は律の歌といふ事ぢや、

青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠

是は催馬樂の律の歌ぢや　「片糸」は合せぬ糸の事、糸を合せるには片糸をより合せるのぢや　「ぬふてふ」は「ぬふといふ」といふ事　鶯が枝から枝と飛びうつるさまは針で物を縫ふやうに見えるものぢやから、鶯に縫ふといふ詞が用ひられてあつたのを活かして笠をぬふというたので、笠は縫うて作るもの故ぢや　ぬふてふの詞がどうもさう聞えると古人の説ぢや　さて柳や梅は鶯の常に木傳ふ木ぢやからいふのである、○もえいでた青柳の糸を、片糸によりかけて、さて鶯が縫ふといふ笠は、(どのやうな笠かと思へば)梅の花笠である、

眞金ふくきびの中山おびにせる細谷川のおとのさやけさ

此歌は承和の御べのきびの國の歌

是は萬葉に「大君の三笠の山の帶にせる細谷川の音のさやけさ」と大かた同じ歌ぢや　偖此歌から後の近江のや鏡の山といふまでは皆催馬樂の呂歌ぢや

「眞金ふく」は吉備の中山の枕詞　吉備ノ中山は備中ノ國賀陽郡　「帶にせる」は、山の

腰をめぐつて流れること　細谷川は谷川の細きものの汎稱　今此吉備ノ中山に細谷川といふ川のあるは此歌から名けられたものらしい、○あゝこの吉備の中山の腰を帶のやうに繞つて流れる細谷川の水音のいかにもさやかに清い事ぢや　注の「御べ」は「おほむべ」とよむので、大嘗といふ事、即大嘗祭ぢや　承和は仁明天皇を申す　此御時の大嘗祭は主基の國が備中で悠紀は近江であつたのぢや、

美作やくめのさら山さら〳〵にわが名はたてじ萬代までに

これは水のをの御べの美作ノ國のうた

「久米の皿山は、久米の鄕の皿山といふので久米ノ皿山といふ一聯の名ではない美作ノ國久米郡ぢやから美作やといふのぢや　是も戀歌から取つたものでくめのさら山はさら〳〵にといはん序ぢや、○美作の國久米の鄕なる皿山の、さら〳〵に、即ち唯一向にわしが名をば立てまい、萬代までをかけて」　さて水尾は清和天皇ぢや　此御時の大嘗會は悠紀が三河、主基が美作ぢや、

みの〻國關のふぢ川たえずして君につかえむ萬代までに

これは元慶の御べのみの〻うた

關の藤川は藤川ともいふ、今藤子川といふ川ぢや、○美濃の國の關の藤川の流れのやうに絶えるといふ事なく、常に君に奉仕しまつらん、萬代の末までもさて元慶は陽成天皇を申す　此大嘗會の悠紀は美濃國席田郡、主基は備中國都宇郡ぢや、

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは仁和の御べのいせの國のうた

長濱は伊勢ノ國ぢや、○君が御代は際限もあるまい、御代の永いながさの數限りない眞砂の數はたとへ算へ盡すとても、（御代の數は算へ盡されまい）　仁和は光孝天皇で悠紀は伊勢ノ國員辨郡、主基は備前ノ國和氣郡ぢや、

大とものくろぬし

近江のや鏡の山をたてたればかねてぞみゆる君がちとせは

これは今上の御べのあふみのうた

「近江のや」のやは讃詠のやで、石見のや高角山のやと同じぢや　かゞみの山は

即ち鏡山ぢや　かゝみの名に依て、直ちに鏡に取なしてよんだもので鏡は臺を立てゝ對ふものぢやから「たてたれば」といふ　「かねて」は豫てゝ前方よりといふこと、○近江の國の鏡の山といふ鏡を立つた事であるからして、前方より見える事ぢや、君が千年の御代を保たせ玉はんことは」　今上は即ち延喜醍醐天皇　近江は悠紀の國ぢや、

東歌

「あづまうた」とよむので、うたひものに用ひられた東國の歌ぢや、

みちのくうた

あふくまに霧たちわたりあけぬとも君をばやらじまてばすべなし

「あふくま」は阿武隈川ぢや、今は岩代國伊達郡ぢや　「まてばすべなし」は今現在待つて居るといふではない、設けていふので待つて居るといふはせんすべなく苦しいものぢやといふが「まてばすべなし」ぢや、○阿武隈川に一ぱい霧が立こめて夜が明けてしまふとても君をば決して歸してはやるまい　來るか來るかと待つて居るといふは、せんかたなく苦しい事ぢやから、

みちのくはいづくはあれど鹽釜の浦こぐ船のつなでかなしも

「いづくはあれど」は、どこにも見るべき所はあるが、其うちにもといふ意　鹽釜の浦は今は陸前ぢや　「綱手」は和名抄に牽紋、豆奈天、挽挽繩也とあるに依て、舊說船綱を引く事とばかりいふてあるは委しくない　綱手は船具で即ち和名抄にも舟具のうちの纜の次に載せられてあるが　こゝに言ふ「つなで」は其舟具を引くしわざをいふので、即ち引船の事を打任せて「つなで」といふのぢや、

「かなし」は、悲哀な事にも、愛する事にも、又面白く興ある事にも、すべて深く身にしみて心に感ずるをいふ詞で、深く愛し思ふ子を「かなし子」といふでもしられる此歌では面白くてたまらぬ事をいふのぢや　「かなしも」のもは歎辭で、マアといふ程の辭ぢや、○陸奥の國には、どこにも目にとまる所はあるけれど、其うちにも鹽釜の浦を漕ぐ舟が引舟をするさまは、どうも面白くてたまらないマア

わがせこを都にやりて鹽釜のまがきの島のまつぞ戀しき

離の嶋は、鹽釜の海中にある小島ぢや「鹽釜のまがきの島のはまつといふ序で松を待つにかけたのぢや　これも人を待つとておのづからつく〳〵と眺めるやうの意がひゞくぢや、○内の人を京へ旅立たせてやつておいて、さていつかへるかと毎日々々あれあの見える鹽釜の浦の離の島の松、イヤ待つ間のサ懇しい事はよ、

をくろざきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはまし

を

小黒崎は地名ぢやが場所は明かでない「三つの小島」はこゝにある三つの小嶼で其景色がいかにもよいところとみえる「つと」は苞でみやげといふ事其景色のよいを京へのみやげにしたくおもふから、人ならばいざといはんとぢや、人ならば苞にといふではない「いざ」は誘ひ促がす聲サァといふ事、サァ一しよにといふ事ぢや、○小黒崎から見渡す三つの小島のけしきがいかにもよくて京のみやげにしたいから　もし人であるならばサァ一しよにといふべきものを、島ぢやからしかたがない。

みさふらひみかさとまうせ宮城野の木の下露は雨にまされり

是は身分の重い人が宮城野を通行するさまからよんだ歌で「みさふらひ」は近侍の從者をいふ「みかさとまうせ」御笠と申して奉れといふので即ち御笠をまゐらせよとの事ぢや、○御側仕への侍衆御笠と申してまゐらせよ　宮城野は木が生ひ茂つて居て、其下露は雨よりまさつて衣服をぬらすから、

もがみ川のぼればくだるいな舟のいなにはあらず此月ばかり

是は戀歌ぢや　最上川は今は羽前ぢや　出羽となつたも古い事ぢやが、往古は陸奥であつたから、陸奥歌に入れられたらうと古人の説ぢや　上の句はいなにはといはん序「のぼればくだる」はのぼるもありくだるもあるといふ事、稲舟は、稲をつみたる舟ぢや　稲を積んで運ぶ舟が、これはのぼり、かれは下るがのぼれば下るぢや「いなにはあらず」否といふにてはあらずで、即ちいやぢやと拒絶するではないぢや「此月ばかり」は、何かの都合があつて今月中はさしつかへるといふのぢや、○最上川をのぼるもあり、下るもある、稲をつみ運ぶいな舟の、いな即ちいやぢやと斷るのではない、唯今月だけはさしつかへる

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ

是も戀歌ぢや「あだし心」は他心といふ事即ち異心で操をやぶるをいふ「末の松山」は今は陸前國宮城郡ぢやが　これは此歌から名けられたもので、此歌にいうたは海末の松のある山をいうたのぢやらうと古説ぢや　とに角海岸を少し離れてをる山ぢやから、其山を浪がこえるといふ事のないといふにてゝではいうたものぢや、○君をさしおいて異心をわたしが持つ事ならば、あの末の松山を浪がうちこえる事であらう、左樣の事は夢にもあるべき事でない」

さがみうた

小よろぎの磯たちならしいそなつむめざしぬらすな沖にをれ波

小よろぎの磯は、相模國余綾郡ぢや「たちならし」の「ならし」はそへていふ詞で、ふみならすのならすと同じく、只立つといふこと　磯菜は海草をいふ　めざしは兒童でうなゐをいふ「沖にをれ」は沖に居れと命令するのぢや　波には立居といふこと常ぢや、折れぢやといふ説は自他を誤るもので取られない、○

小よろぎの磯どはりに立いでゝ海草をひろひ取つてをる、あの愛らしい子供をぬらすことなかれ沖にばかり居れよよせくる白波よ、

ひだちうた

つくはねのこのもかのもに陰はあれど君がみかげにまさる陰はなし

「このもかのも」は此面彼面で、こなたかなたといふ事　此詞をむつかしくいふ説もあるが、萬葉に彼面此面といふが有て、こなたかなたといふことであるから、これもそれと同じぢや　筑波山は樹木の殊に繁茂して居るところぢやからそれに依ていうたのぢや、○筑波山は樹木が多い山ぢやから、こなたにも、又かなたにも蔭は澤山ある事ぢやけれど、しかし君の御蔭にまさる蔭はないことである、

筑波嶺の嶺のもみぢ葉おちつもりしるもしらぬもなべてかなしも

此東歌はすべて何人が、いかなる時によんだものといふ事がしられないうち

にも、殊に此歌などはそれがしられないでは解き難い歌ぢやが　歌がらに依て見れば、遠鏡に言はれた如く、國司などが、其國内の人民に對してよんだものらしくもみえる　上の句は序で、「しるもしらぬも」は見しるも見しらぬもといふ事　落ちつもつたもみぢ葉の上の方は色が見しられるが、下の方は見しられないを、人の顔を見識るも見識らぬもといふにかけたのぢや　「かなしも」は、この歌では身にしみて感然に思ふこと　もは前と同じく歎辭ぢや、○筑波山の嶺の紅葉ばがちりつもつてをるが、其つもつて居る上の方は色が見しられ下は見しられぬが　見しるも見しらぬもすべてあはれと身にしみて思はれる、マア、(この多くの人々は)

かひうた

甲斐がねをさやにも見しがけゝれなくよこほりふせるさやの中山

是は、甲斐の國の人が、上方へのぼる時佐夜の中山を經て後よんだ歌で　甲斐がねは、白根山の事で、甲斐の國中の高山ぢや　「さやにもみしが」はさやかにも見てしがなといふ事で、はつきりとも見たいものぢやにといふ意　「けゝれなく」は心なくといふ事、こゝろをけゝれといふは方言ぢや　「よこほりふせる」は横はり伏せるで、さやの中山が遮り横はるをいふ、○なつかしい故郷の山の甲斐がね、即ち白根山を明瞭とも見たいものぢやのに心がなく、横はつて遮つて居る佐夜の中山ぢや、(アヽにくい山ぢや)

かひがねを根こし山こし吹く風を人にもがもやことつてやらむ

是は前の歌とは反對で、甲斐の國に在る人が、故郷を慕ふ歌ぢや　「ねこし山こし吹く」は、即ち甲斐が根の根こし山こし吹くといふので、かひがねを吹こす風の事ぢや　「人にもがもや」は、「人にマアしたいものであるなア」といふ事　「ことつてやらむ」は言傳をしてやらうといふぢや、○かひがね、即ち白根山の嶺や山を吹き越して往く風を、人にマアしたいものであるなア、人ならば言傳をしてやらうものを、

いせうた

をふの浦にかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねて
かたらはむ

是は戀歌ぢや　をふの浦は所在不明ぢや　上の句はなりもならずもの序ぢやが「片枝さしおほひ」の句が、男女の親達の内、一方のみ承諾したといふやうな意がひゞくぢや「なるなし」は、梨の實のなること　さて「なるもならずも」というて、實の結るを、婚姻の成り成らずにかけたのぢや、〇をふの浦に片枝ばかりが榮え生ひ繁りてなる梨の實の、なるにもせよ、又ならぬにもせよ、とに角一しよに寐て話しませう、

冬のかものまつりのうた　藤原敏行朝臣

ちはやふるかものやしろの姫小松よろづよふとも色はかはらじ

冬のかもまつりは十一月の賀茂臨時祭の事をいふ　此祭は宇多天皇の寛平元年十一月はじめて起されたもので、藤原敏行に仰せつけられてあづまあそびの歌をよましめられたのぢや　此大歌所の御歌は大方よみ人をしるされないのは、作者がわからぬからの事で、前の黒主の歌と此歌丈は作者が知られて居るからかゝれたのぢや　さて「ちはやふる」は例の枕詞　歌からさらしとしてやすらかに風調いかにものどかで卷の終尾におかるべき姿の歌ぢや と古人も申された、〇神さびかうしゝ賀茂神社の境内の姫小松は萬代の久しきを經過したりとも色のかはることなくます〳〵　生茂るであらう、(神社と共に)

家々稱證本之本乍書入以墨滅哥今別書之

巻第十　物名部

ひくらし

そま人は宮木ひくらし足ひきの山の山びこよびとよむなり

つらゆき

「そま人」は山に入て材木を伐り取る人　「宮木」は宮殿に用ふべき材木　「よびとよむ」は多人數の聲を傳へるをいふ　多人數の杣男が材木小屋に集つて材木をこなす器しい聲を傳へるのぢや、〇杣人が大勢集まつて材木をこなすらしい、あの山からこだまの聲がやかましく聞えてくるわい

在郭公下空蟬上

此「ひくらし」の歌が物名の部の「ほと、きす」と「うつせみ」との間にあるといふのぢや、

かけりても何をかたまのきてもみむからはほのほとなりにしものを　かちおん

何をか靈魂の來ても見られやうぞとの意ぢや　死者の事にいふ歌ぢや、○空をかけつても何としてか靈魂が來て見るといふ事が出來やうぞ　骸軀は既に火葬して炎となつてしまうたものを、(灰が駈けられる筈がない)

をかたまの木、友則下

くれのおもこし時とこひつゝをれば夕ぐれのおもかげにのみ見え渡るかな　つらゆき

「くれのおも」は和名抄に懐香一名懐芸、久禮乃於毛とあるものぢや　「こし時と」は、戀人の曾て來たりし時刻とてとの事、○丁度今時分入來りし時刻ぞとて、戀ひ慕ひつゝ居れば夕暮がたの目の先に其人の姿が見えるやうに思はれるかいなァ、

忍草利貞下

おきのゐ　みやこじまをのゝこまちおきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこしまべのわかれなりけり

沖の井、都島ともに地名ぢやらう　「おきのゐて」は熾が身體に引きつくこと　熾は炭の火となつたもの、それが身に引着くが熾の居てぢや　「みやこ島への別」は都と島へとの遠別離といふ事、○熾が躰軀に引着いて身をやき焦すよりも苦しく悲しいのは、都と島邊との遠い離別をする事である、

からこと清行下

そめどの　あはた

うきめをばよそめとのみぞのがれゆく雲のあはだつ山のふもとに

あやもち

染殿、粟田ともに地名ぢや　なれども注の清和天皇おりゐさせられての後移らせられたをよんだものとは思はれない、歌がらが自身の事をいうたものらしくみえるからぢや　「雲のあはだつ」は雲がしげく立つこと、○世の中の憂いといふ事をば、よそ事とさつぱりしぬいてサわしはにげのがれてゆきます、雲がしげく立つ靜かな山のふもとの方にさ、

此歌は水のをのみかどそめどのよりあはたへうつりたまうける時によめる　桂宮下

卷第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪の下

けふ人をこふる心は大井川ながるゝ水におとらさりけり

二三の句は、戀ふる心が多いといふを大井川にかけたので多いは深くしげい意　流るゝ水に劣らぬとは、たぎり滿ちて盛なのぢや、○今日わしが戀ひてがるゝ心の深くしげいのは大井川を流れてゆく水のたぎり滿ちて盛なにも劣らぬ事であるわい、

わぎもこにあふ阪山のしのすゝきほには出でずもこひ渡るかな

吾妹子に逢ふといふを、逢阪山といひかけて、さて表面に顯はさないでといふを、「ほにはいでず」といふので　もは歎辭　「しのすゝき」といふ詞のうちに忍ぶといふやうな意が句ふのぢや、○わが戀ひおもふ妹に逢ふといふ事は、あの逢阪山のしのすゝきの、ほには出でず　即ち表面には顯はさないで內々でヤァ戀つゝけて居るわいなア、

卷第十三

戀しくはしたにを思へ紫の下

大上のとこの山なるいさや川いさとこたへてわが名もらすな

此歌ある人あめのみかどのあふみのうねべに給へると

此歌は萬葉十一に「狗上のとこの山なるいさや川いさとをきこせわか名のらすな」とある歌の轉じたものぢや「犬上」は近江ノ國犬上郡鳥籠ノ山不知哉川ともにそこぢや　不知哉川は今大堀川とも芹川ともいふ　上の句は「いさ」といはん爲の序で「いさ」は知らずといふを意味する聲音といふ事は、春の部、人はいさの歌のところでお話し申しおいた。○犬上郡なる鳥籠の山の麓を流れる不知哉川のいさといふやうに　若しも人が問ひ聞く事があらうとも、いさや、即ちいやさ知らぬというて、わしが名をばもらしなさるな、といふのぢやさて此注は例のとられない　前にお話し申す萬葉の歌の轉じたもので、其萬葉の歌は、作者がしれぬ歌であるからぢや、

かへし

山しなの音羽の瀧のおとにだに人のしるべくわがこひめやも　うねべのたてまつれる

これは全くとられない歌ぢや　先第一「うねべのたてまつれる」とあるからは、「御かへし」といはねばならぬ　又前の「犬上の」の歌はよみ人しらずの歌で　ある説にあめのみかど云々といふをうけてこれもよみ人しらずの歌のかへしぢやから、御の字がないのぢやといふ事ならば、此うねべ云々も左注にある人うねべ云々となくてはならぬ　且又此歌は、戀三に「山しなの音羽の山の」とある歌の山を瀧とし「こひめかも」をやもとしたまでのものぢやから、かた〳〵全くとられないといふのである、

卷第十四

おもふてふことのはのみや秋をへて、下
そとほりひめのひとりゐてみかどをこひたてまつりて
わがせこがくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしも

是は允恭紀に見えて、それに、は「わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものおこなひこよひしるしも」とある歌ぢや　「さゝがに」は蜘の形は蟹に似て小なるものぢやから小やかなる蟹といふ事ぢやが、それをやがて枕詞としてさゝがにの蜘といふのぢや　「ふるまひ」は有樣しぶりといふ事　蜘蛛が衣服にか

丶る時は思ふ人の來るものといふこと、古く和漢共いはれた事は既にお話し申しおいた、○わたしが思ひ奉る君が御入りになるべき晩ぢや、あのさゝがにの蜘の有樣しぶりによりて、前方からいちじるしく知られる事ぢやゞァ、

深養父戀しとはたがなづけゝむことならむ下

貫之

道しらばつみにもゆかむ住の江の岸におふてふ戀わすれ草

說草は之を食すれば人をして物を忘れしめるものぢやといはれてをるもの住の江には說草が生ずるによし古くからいうてをる地ぢや　依て說草に戀といふ詞をそへ、一種の名として趣向を立つたものぢや、○往き道を知つて居ることならば、殊更に摘みにゞァ往くべき事である　住の江の岸に生へてをるといふ戀を忘れるといふ戀說草を、(それを用ひたなら此苦しい戀の思ひを忘れるであらうから、

古今和歌集卷第二十終

古今集詳解　大尾

古今集詳解大歌所御歌卷之二十

明治四十一年十一月一日印刷
明治四十一年十一月四日發行

著作者　東京市本郷駒込富士前町五十五番地　中郁秋香

發行者　東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川又三郎

印刷者　東京市京橋區弓町二十四番地　高塚慶次

印刷所　東京市京橋區弓町二十四番地　三協印刷株式會社

卷一　定價金四拾五錢
卷二　定價金五拾五錢
卷三　定價金五拾五錢
卷四　定價金五拾五錢

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六番地　振替貯金口座四一〇九番　前川文榮閣　電話本局五七七番

中邨秋香先生著述略目錄

書名	冊數	正價	書名	冊數	正價	書名	冊數	正價
落窪物語大成	四	一、八〇〇	中古文鑑	二	五、〇〇〇	白川樂翁公	一	一、三〇
落窪物落講義	三	一、三五〇	同參考書	一	一、二五〇	菅公傳	一	一〇〇
校訂吉野拾遺詳解	一	一、二五〇	文鑑千草の錦	一	七〇〇	愛國唱歌	一	一、〇六〇
古今集詳解	一	二、二五〇	書簡文大成	一	一、〇〇〇	同參考書	一	一、〇五〇
後撰集詳解	一	近刊	新編書簡文法式	一	五〇〇	秋香集短歌	一	四八〇
皇國文法釋義	一	一、〇〇〇	新編女子書簡文法式	一	六〇〇	秋香集長歌	一	近刊
皇國文法	一	一、五〇	小野鶯堂先生著新編書簡文例	一	六〇〇	秋香歌かたり	一	一、五〇〇
新體詩歌自在	一	一、〇〇〇	小野鶯堂先生著新編女子書簡文例	一	六〇〇			
故小中村清矩先生合著改正增訂日用文鑑	二	五〇〇	小野鶯堂先生著新編手紙	一	四五〇			
同參考書	一	一、二五〇	小野鶯堂先生著女子消息文の手ほどき	一	四五〇			

Catalogue

四十二年十月改正

文榮閣發賣圖書目錄

東京市京橋區中橋廣小路矢番地

電話本局五百七十七番

前川文榮閣出版發行圖書目錄

高橋五郎先生著書目

釋迦論

菊判 定價金八十錢 郵稅十錢

一切の世慾を退けつゝ一切衆生の爲めに不退轉の誓を起せる大恩教主の眞面目を著者獨特の精緻の見を以て詳論したるもの即ち是れ

增訂 人生觀

菊判 定價金七十錢 郵稅十錢

本書は古今幾多の人生觀を揭擧して遂に健全無病なる安心立命的大人生觀を說述せるもの、人間たる本分を知らんと欲せば本書を讀め

宇宙觀

上製並製 定價金壹圓五十錢 郵稅各十五錢

萬物の靈長たるの人唯醉生夢死世は何たるか我は何たるかは何死は何たるの理を知らずして有るべけんや本書道般生の理を闡明して又餘す所なし

人生哲學

菊判 定價金七十錢 郵稅十五錢

學問と宗教は本書を俟つて初めて撃瞑の和陪に逃すと云ふべし蓋に是れ超群絕倫の最大人生哲學！

最新 一元哲學

菊判 定價金五十八錢 郵稅十錢

著者が該博の識と深遠の考慮とは茲に一元哲學一卷を出す。附錄に黑岩氏の「天人論」の一元主義を評論せる所獨痛快の著なりと謂ふべし

戰爭哲學

菊判 定價金四十六錢 郵稅十錢

出で、戰ふ者居て守る者共に戰爭の哲理を常に胸底に藏するを要す、本書が立論の嶄新なる所逸すべからざるの著也

世界三聖論

菊判 定價金四十六錢 郵稅十錢

著者の犀利なる筆を以て世界に於ける三聖の眞面目を紙上に躍如たらしむるもの即ち本書也矣

日蓮論

菊判 定價金六十錢 郵稅十錢

大日本の法華經と唱へて自ら國家の柱石を以て任じ權勢と戰ひ迫害に對せる英雄僧日蓮の異彩を詳述せるは本書一篇の消息なり

豫言者 宮崎虎之助君著

我が新福音

菊判 定價金四十錢 郵稅六錢

俗姓宮崎道名メシヤ佛陀、虎之助君抱負の大なる其名の炳乎たる世の既に知る所今や我が新福音一篇を著す抑も如何なる福音をか傳ふる、

正岡藝陽君著

新時代の道德

四六判 定價金廿五錢 郵稅四錢

文壇の拗者大俗の牧師たる藝陽君新に新時代の道德なる一書を公にす氏が道德觀抑もや如何なる者なや窺ちす

屈山 小室重弘君著

實驗雄辯學

菊判 定價金廿五錢 郵稅六錢

大演說家たる著者が多年の實驗に基き談論の秘訣雄辯の妙用を闡述せられたる者學生諸君が必ず一本を備ふべきの書也

獨乙ゲーテ原著 高橋五郎君譯

フアウスト

四六判 定價金七十五錢 郵稅十錢

ゲーテが傑作フアウストは今や拉し來りて高橋五郎先生が明快なる邦文に譯する所となる原文一行邦文一行一字一句をも苟くもせず文墨稀出の快著たり

獨逸ゲーテ原著 米國テーロル飯譯 高橋五郎君註疏

英文 フアウスト

四六判 定價金四十五錢 郵稅六錢

本書は英文の枠を選び必要なる註疏を附して初學者の便にせらる英學者獨研究の好伴侶

獨乙エッカルト原著 齊木仙醉君譯

譽の毒盃

菊判 定價金五十八錢 郵稅十錢

獨逸文豪エッカルトの傑作にして材を希臘に取りたる大戲曲也ソクラテース、プラトン、ヘレナ等幾多の登場人物は紙上に活躍す

海老名彈正先生著

耶蘇基督傳

菊判 定價金六十錢 郵稅十錢

井上博士の釋迦牟尼傳と相俟つて我讀書界多年の渴を充たしたるものは本書也現今基督傳中の白眉！

文學博士 井上哲次郎先生著

釋迦牟尼傳

菊判 定價金六十錢 郵稅十錢

釋迦の史傳として尤も完全無缺なる又考證該博なるものは本書なり好評嘖々陸續として申込み絕えず內容推して知るべきなり

文學博士 高瀨武次郎先生著

王陽明詳傳

菊版 洋裝 定價金七十五錢 郵稅十

王陽明の事蹟性行學說を詳密平易に傳したる者は本書也有爲の士は陽明が成効の歷史を繙き簡易實用の學を味ひ玉ふべし

高島 圓先生著

一休和尚傳

菊判 洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

元日に髑髏を振廻して人の度胆を抜き末期に説を晞ふて梵天に捧げたる一休和尚は本篇に傳ぜられて餘す所なし

濱口惠璋先生著

曇鸞大師傳

菊判 洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

支那南北朝の時代黄河々畔雁門の地にありて徐ろに靜寧の工夫を凝らし心靈慰安の道を宣べたる大師の傳を見よ

大內青巒先生閲 峰玄光先生著

道元禪師傳

菊判 洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

禪師の禪は遂に曹洞宗なるものを形造れり 師が事蹟性行學說は本書傳へて餘蘊なし

小野藤太先生著

弘法大師傳

菊判 洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

書道の仙としての大師 佛道啓發者としての大師の傳は如何なる能に依りて紹介せられたるか 庶幾くば來つて本書に其の眞價を知れ

梅澤和軒先生著

西行法師傳

菊判 洋裝 定價金六十錢 郵稅八

歌仙としての法師求道者としての法師は著者が多年の研究に依りて茲に紹介せらる希くは諸士よ天地人生に對する眞詩人の心靈の響を聞け

文學博士 井上哲次郎先生著

菩提達磨傳

近刊 定價金七十五錢 郵稅八

文學博士 村上專精先生述

教理と實踐

菊判 洋裝 定價金四十五錢 郵稅七

佛教研究の眼目とする所は教理の研究より寧ろ實踐躬行を重とす本書は尤も簡明に此の實踐を示せるものにして教理と實踐とあれ共大部分實踐に關するもの今や淨土は開かれたり彼岸に往生せんとせば速かに本書に就けよ

文學博士 南條文雄序 望月信亨 文學博士 村上專精序 萩原雲來 文學博士 前田慧雲序 鈴木鴻幸 文學博士 高楠順次郎序 加藤玄智 共著

佛教大辭典

四六倍判六號字三段組正價金十二圓 郵稅實五十錢

辭典類の出版寔に汗牛充棟も只ならずと雖も未だ本書の如く精細に周到なる用意を以て成りしは嘗て聞かざる所なり

此の創始の大事業列記の大家が如何に苦心慘憺の極になりしや既に出づべかりしも期に遲るゝ事僅か半歲にして既に世論囂然として起る如何に其の注目せられしかを知るべき也今や博旁搜引漸く稿を脫す正に本年七月を期して發賣せんとす語數大小約三萬佛教に關する事項は盡く網羅して遺す所なし

文學博士 前田慧雲先生著

大乘佛教史論

菊判 全一冊 定價金七十五錢 郵稅八錢

本書は大乘佛教の教理系統の異同を歷史的に考證したるものなり議論の明快と文辭の流暢とは的確なる考證と相俟つて一段の光彩を加ふ

舟橋水哉先生著

小乘佛教史論

菊判 洋裝 定價金五十錢 郵稅八錢

原始佛教は今日所謂小乘教にして大乘教は後世佛說に擴說敷演せし新說なり本書は小乘教の印度より支那に傳來せし事實を蒐集して之に意見を加へ以て世に問はんとするものなり希くは斯學研究の徒よ來つて本書一卷を繙け

トルストイ伯著 加藤直士譯

我宗教

菊判 洋裝 定價金七十五錢 郵稅八錢

伯を知らんと欲せば須らく本書に就け諸君本書を採りて心解靈通讀むで値に三四行に至らば伯は從容として眼前に到らむ

及川泰次郎 薩島武二郎 長原止水 赤松蟬作 共著

地理讀本

菊判 クロース製 定價金六十錢 郵稅八錢

極めて平易通俗に地理學に關する一般の智識を甘文體に綴りたるもの 家庭用として好適の教科參考用書たり

文學博士 南條文雄先生 文學博士 村上專精先生 文學博士 前田慧雲先生 監修

親鸞聖人全集

布裝 洋裝 上下各金壹圓 郵稅各十錢

苟も眞宗の流を汲み聖人の人格に接せんとするものは是非一本を座右に供して永劫の生命を彼岸に得よ

田中智學序 山崎紫紅君著

法華經物語

菊版 洋裝 定價金五十六錢 郵稅五

佛典の中心たる法華經の光彩は日の天に於けるが如く佛書の樞機こゝに發す 正法弘通の一助としてこの法華經物語は出でたり

女子大學校教授
學習院女子部教授
女子大學校教授
鹽井雨江先生著
小野鵞堂先生書
中村春堂先生書

新體女子用文

木版牛紙摺和裝
定價金七十錢
郵稅六錢

現代時文の大家鹽井雨江先生の新作を能觀界の巨擘小野鵞堂中村春堂兩先生が淨書せられたるもの加ふるに極上和紙に印刷し高尚幽雅なる製本の體裁は更らに錦上花を添ふるものと云ふべし

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著

文藝 千草の錦

和裝雅製本
定價金七十錢
郵稅十錢

先生が三十餘年間古學復興以來諸名家の文中男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百編を選出せられたるもの即ち本書也

中邨秋香先生新作 小野鵞堂先生書

新編手紙 男子用

本版牛紙摺
無類の美本
男女各一冊

女子消息 文の手ほどき

定價金四十五錢
郵稅四錢

本書は中邨秋香先生の新作を小野鵞堂先生が大字に書せられたるもの習字作文兩用の好著たり

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著

古今集詳解

合本總クロス美本
定價貳圓廿五錢
分本 卷壹、定價四拾五錢 卷二、卷三、卷四、定價各五拾五錢郵稅各六錢

國歌國文研究者：勿論我國文學の花と味はんとするものは前人未發の解釋書たる本書を先づ繙け

中邨秋香先生著 小野鵞堂先生書

新編書簡文例 男子用

木版高尚牛紙雅摺
定價金六十錢
郵稅六錢

新編 女子書簡文例

本書の文例は秋香先生の惱腐を搾れる作、書は鵞堂先生が大手腕を揮ひたるもの兩々相俟ちて眞個男女學生が好伴侶

中邨秋香先生著

新編書簡文法式 男子用

總クロス金字入
定價金五十錢
郵稅六錢

新編 女子書簡文法式

美本
定價金六十錢
郵稅六錢

書簡に法式を知らざるは尚人に禮なきが如し本書は今日の現狀に依り新を對照して以て時宜に從ひ適當の式を設けられたるものなり

高須五湖先生著

速成 日露會話獨習

總クロース金字入
定價金五十錢
郵稅六錢

露語の發音、文法より、日常必要なる各種の用語を網羅せるもの眞に當世會話の粹を萃めたるものと言ふべし

渡部竹蔭君著

明治の家庭

四六判洋裝
定價金廿五錢
郵稅四錢

本書は我國現今の不完全不規則極まれる家庭を矯正せんが爲めに生れたるもの家庭の王たるもの丶必讀すべき良書也

陸軍少將龜岡泰辰校閲 軍事普及會編

改正 徵兵問答

四六判洋裝
定價金三十錢
郵稅四錢

本書は徵兵に關する凡ての事を記せるものにして國家の干城たる青年子弟が來るべき務の最大說明書也

綱島梁川先生著

病間錄

布裝洋裝
定價金壹圓
郵稅十錢

本書は著者內生活の實錄にして神秘久遠の海潮音を傳へたる近代的默示錄也

綱島梁川先生著

回光錄

布裝洋裝
定價金壹圓廿錢
郵稅十二錢

法悅と健鬪とを合せ得たる靜寂にして而も積極的なる著者の面目と其聖生活の消息を知らんと欲する者は來つて此の回光錄一卷を繙け

中村春雨先生著

新約物語

布裝洋裝
定價金壹圓
郵稅十錢

舊約物語

布裝洋裝
定價金壹圓五十錢
郵稅十二錢

其寄敎の眞趣を家庭に傳へんが爲めに著者が苦心の末大成せしめたる通俗の聖書にして最も平易に編述せられたるものなり

神學博士 三並良 安倍能成兩先生合譯

オルデンベルグ氏 佛陀傳

總クロース金字入
菊判五百餘頁
定價金壹圓五十錢
郵稅十二錢

本書は南方佛敎を詳說せられたるものにして彼の錫蘭島に傳來せる「パリー」の經典に基き最も嚴格に多年の積蓄を傾注して譯せられたるものなれば現時の佛敎界に唯一無二の好參考書たるを疑はず近く讀者の机上に見へんとす

安部磯雄君著

理想の人

四六判洋裝 定價金七十錢 郵稅八

虛僞虛飾の貴族的道德を痛罵して眞摯純朴の平民的道德を鼓吹し高尙なる士君子と善良なる市民の眞面目を發揮したるもの即ち之れ

山路愛山君著

支那思想史

四六判洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

自家の研鑽は自家知る東洋の思想は東洋の人自ら解釋せざるべからず著者の此論を讀くや久し此書則ち之を實にするもの〻一也

浩々歌客君著

鷗心錄

四六判洋裝 定價金六十錢 郵稅六

現代文壇に獨歩する逸觀明識異彩ある雄麗高華の文章を收めて此の鷗心錄にあり江湖讀書社會の多々益々味ふべき絶好文字也

堺枯川君著

婦人問題

四六判洋裝 定價金四十錢 郵稅六

著者は現社會主義者中の綽々たるものにして また家庭問題婦人問題に關して此主義に立つ一家の見を有す抑もや如何なる論をや有する

海老名彈正先生著

靈海新潮

洋裝函入 定價金八十錢 郵稅八

著者が滿天下に號叫せる最大眼孔を轉めたるものにして現代宗教上の實際問題に就ての解釋を試み其根本の要義を提示せるもの也

高木壬太郎先生著

基督教安心論

洋裝布製 定價金七十錢 郵稅八

著者が講壇及文壇より赤幟を拔擢したるものにして基督教の立場より安心の道を說きたる者 人生問題は本書に依て初めて解決せられん

清澤滿之先生著

懺悔錄

洋裝布製 定價金七十錢 郵稅十

自河派の領袖として多年鬱結せる本山の陋習を打破せんと試みたる教壇上の勇士清澤先生の遺著也 如何なる事を懺悔せる！

浩々洞同人著

沈思錄

洋裝布製 定價金六十錢 郵稅十

讀者は熱湯を飲むが如き煩悶の中に本書を繙ひて其清涼の氣に觸れ以て宇宙の大靈の救濟に接し安住の天地に入らんとはし給はずや

滝精一先生著

藝術雜話

洋裝布製 定價金四十錢 郵稅四

何人にも理解し易く所謂應用美學の一書として美術家實業家には勿論苟も美術に趣味を有する人々の必讀すべき書は本書也

上田敏先生著

文藝講話

布製洋裝 定價金四十錢 郵稅四

萬般の藝術に就きて隨時公にせられる泰西思潮研究の講話集也 斧質簡殺なる體度を以て高遠精緻の說を述ぶる所他に其比なし

五十嵐力先生譯

兒童の研究

布製美本 定價金四十錢 郵稅四

人の性格の固定するは兒童教育の眼目也後來の教育の根本實に兒童教育にあり子を預れる教師人性の芽朋に美しき枝振をなさしめんとせば本書を讀め

建部遯吾先生著

靜觀餘錄

布製美本 定價金四十錢 郵稅四

冷かなること水の如くにして透徹玉を欺き犀利なる觀察は事物の眞に徹底す靜觀餘錄の滋味潺湲として流るゝ泉の如く掬せば即ち玲瓏の響あり

山路愛山君著

社會主義管見

四六判洋裝 定價金三十錢 郵稅四

此書は山路愛山先生が其主義を發表せられたる一大論文也 語は平易に意は深く全卷假名付にして何人にも解し易からしむ

木下尙江君著

懺悔

四六判洋裝 定價金卅五錢 郵稅四

戀に惱み死生に惱みたる著者が始めて人生の奧義に觸れて忽然新生活に驀進せんとする戰の宣言書也

高濱虛子君著

俳諧一口噺

四六判洋裝 定價金五十錢 郵稅六

俳諧一口噺は子規氏の臨終に對して俳文の時代的變遷及進歩を示す虛子氏の文は幅あり深あり 其內面的觀察は獨特の長所なり

河東碧梧桐君著

俳句評釋

全二冊 定價各金廿五錢 郵稅各四錢

本書は猿蓑集を評注せるもの 初學者は勿論已に堂に上りたるものにも必讀の良參考書也